



承前

本作は、以下作品の続編にあたります。前作をまだ読まれていない場合は、下記リンクからどうぞ。

[第一部『神谷内香織は自分を知りたい』](http://p.booklog.jp/book/98662) <http://p.booklog.jp/book/98662>

[第二部『稻荷木燈花は貴方が知りたい』](http://p.booklog.jp/book/114287/) <http://p.booklog.jp/book/114287/>

[第三部『三ト八恵は知りたくなかった』](http://p.booklog.jp/book/118109) <http://p.booklog.jp/book/118109>

■ドッペルゲンガー

ドッペルゲンガーとは、自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種。ドッペルはドイツ語で「二重」、ゲンガーは「歩くもの」。

元来、ドッペルゲンガーは、自分自身の姿を「自ら目撃すること」に主眼がおかれていた。自分を目撃するという幻覚、その現象自体に対する名称が本義なのである。

一方で、現代の本邦におけるドッペルゲンガー概念は多少の幅を持っており、幻覚現象そのものを指すというよりは、「自分自身とそっくりの姿をした個体」あるいは自分自身というよりも単に「誰かのコピーとしての怪異」を指すことがある。幻覚現象ではなく、怪異の個体を指す用語となるのである。その怪異には、本人が抑圧している深層心理や隠れた願望の表出といった役割が与えられることもある。この意味でのドッペルゲンガーは、別人格や、イマジナリーフレンド、アニマ・アニムスといった概念と近接している。

また、幽体離脱のイメージと重ね合わせて語られることも多々ある。すなわち、肉体から遊離した靈魂の部分をして、ドッペルゲンガーとして扱う。中国ではドッペルゲンガーの訳語として「分身」の他に「離魂」が用いられることがあるのも、興味深い。なおこの場合、本人が自ら目撃するだけでなく、多くは他人からも目撃されるし、物理的な接触が可能であることが大半であるという。

慧欧出版『妖怪古今東西』（藤木圭吾・編）より

草苺はるかは何も知らない。

一九九四年五月五日、埼玉県越谷市生まれ。両親はどちらも中学校の教師。一人っ子。父方の祖父母と同居。帰りも遅く休日出勤も多い両親よりむしろ、祖父母に溺愛されて育つ。何か一つのことに熱中すると、並外れた集中力を発揮する。頭の中が冷たく冴え渡り、自らの心臓の音さえも凜としたものになる、とは彼女が小学校の卒業文集に残した表現である。幼少期は、砂遊びであったり木登りであったり、その集中力は専ら外遊びに使われていた。祖父が脚を悪くして以降は、飼っていた柴犬のハチが、門限を過ぎて帰ってこない彼女を家に呼び戻す役目を果たしていた。ハチの手綱で引きずられながら帰宅して、けれどもまだ彼女の心は公園の遊び場にあったものだった。

やがて小学校四年生になった彼女を両親は、学習塾に通わせた。これが彼女の生活パターンを大きく変えてしまい、公園で遊ぶ時間はめっきり減った。行き場を失った彼女の集中力は、しかし幸いなことに、両親の願い通りに勉強に向かい、成績はぐんぐんと伸びていった。一番得意だったのは算数だったが、一番好きだったのは国語だった。活字にのめり込み、図書室の本を端から乱読して、六年生になる頃には祖父の本棚を涉猟するようになった。ページをめくっているうちは梃子でも本を離さなかった。彼女の両親はどちらも公立校の教師だが、娘には中学受験をさせた。勉強が好きみたいだから、挑戦してほしい、ということに二人の間ではなっていたが、それがどこまで本心だったのかは、彼女自身にとっても知れなかった。あるいは内実を知り尽くしている公立中学には、娘を進学させるのに躊躇う何かがあったのかも知れなかった。しかしそんなことをわざわざ彼女は両親に尋ねなかったし、尋ねても答えは返ってこないだろう。そういったタイプの、いわば意思がそれほど明確でない、強調されていないタイプの中学受験というのは、実際のところありふれたものであって、別に珍しくもない。教育熱心な母親が、我が子を叱咤激励して勉学に向かわせるといふ、いわゆるお受験ママ的な光景は、現実にはそう多いものでもないのだ。平凡な家庭。平凡な塾通い。だから彼女のイレギュラー性は、ひとえにその異常な集中力だけだった。一度勉強に打ち込んでしまった草苺はるかは、いくところまで行ってしまった。志望校を選ぶのに、両親も本人も、これと言った意思はなかった。ただなんとなく、提示された幾つかの案について、ミッション系は違うのではないかとノンポリの父は言った。母親も同調した。両親が示した意思は本当にそれくらいで、あとは塾の講師に言われるがままに、偏差値表の一番上の学校を志望校に設定した。両親ははるかを学校説明会に連れていき、校舎を眺めた彼女はただ頷いた。あとは別に、努力の必要はなかった。彼女は集中するだけでよかった。極めて自然に、平常心で、彼女は受験を成功裏に終える。かくして彼女は、中高一貫の名門私立女子校である、忠弥坂学園に進学した。

中学受験を目指す子供たちの塾の教室を見れば一目瞭然な事実であるが、優秀な成績の子供と言うのは、男子と女子とで精神的な成熟に大きな隔たりがある。偏差値70オーバーの小六の教室でそれは極めて顕著であり、女子は中学生を飛び越えて、平均的な女子高校生くらいの雰囲気を感じているものである。それと比べて男子は受験勉強の上ではどんなに規格外の天才である

うが、休み時間にはいかにも小六男子であり、馬鹿騒ぎをして女子から白い視線を送られている。

さて、草薙はるかにはイレギュラーだった。そのどちらでもなかったのだ。男子のように幼いでもなく、女子のように成熟してもいなかった。彼女はただ勉強が出来てしまう、それだけだった。だから中学に入って、制服に袖を通して、周囲が知的にも精神的にも年不相応に成熟した女子だらけになった初日に、初めて自分と周囲の違いを理解した。中学に入ったら、きっと勉強はうんと難しくなる、何しろ優秀な生徒ばかりなのだから、予習復習をしっかりとしないとすぐについていけなくなって、落ちこぼれてしまう。両親はそれを心配していた。しかしはるかは、幸いにもすぐ気づくことが出来た。勉強に心配はない。それよりも心配なのは、周りの女の子たちが湛えている余裕、醸し出される大人びた空気、これにどうやってついていくかだ。

今日この入学式の日、240人の新入生の皆さんを迎えることが出来ました、と校長先生が言った。240人。彼女は急に、自分がとんでもない場所に来てしまったように思えた。周りの239人は皆、そのような事実動じずに、きっと前を向いて、校訓を語る校長先生に聞き入っている。彼女は怖気を震うと同時に、心底安堵した。今、すぐに気づくことが出来て良かった。これに気付かずに、今までのままの自分で時間を過ごしてしまったらと思うと、分岐点の向こう側の自分がひどく恥ずかしく、一人で赤面した。それから彼女は、祖父母に甘えるのをやめた。歩きながらぼうっと物を考えるのをやめた。飼い犬に手綱を引かれるがままにするのをやめた。自分の一つ一つの所作が周りからどのように見られるのかを考えた。通学の電車の中に乗っている大人たちの一人一人の目を、学校のクラスメイト一人一人の目を、自分の中に取り込んだ。二日目の通学からは、彼女は水道橋からの景色を意識することが出来たし、校名の由来でもある忠弥坂を登ることを楽しむことさえ出来た。昨日までの自分は、道のことなど何も覚えていなかったから。

それすらも別に、特別なことではない。自身の相対化が、難関中学に入学する周りの女子よりは遅く、一般的な女子よりは早かった、それだけである。

クラスメイトに、深水(ふかみ)瑞希という子がいた。

六月に、一年生の全員が参加する夏期学校がある。忠弥坂学園の目玉行事の一つであり、二泊三日の高原旅行で親睦を深めようというものだ。日中の行動班で、はるかは瑞希と同じ班になった。同じクラスだがそれまであまり話したことはなかった。背が低くて、写真部に入っていて、時々重そうなカメラを持っているのを見たことがある、その程度だった。ちなみに、小学校のクラスメイトや塾の生徒たちにははるかは一切関心を払っておらず、同じ教室にいたメンバーを今となっては一人として覚えていないのだから、深水瑞希と話したことがほとんど無くても顔と名前が一致して、部活くらい覚えていたのは恐るべき進歩なのである。はるかは絶対に誰にも言わないようにしていたが、彼女は入学三日目の時点で一年生全員の名前を暗記しており、六月には他クラスまで含めて顔と名前の一致もほぼ完璧になっていた。それが小学校までの自分とは違う感じがして、密かに自慢だった。

「写真、撮らないの？」

山頂へ登るゴンドラの中で瑞希と二人になって、しかし彼女が首に下げたカメラを持ち上げようもしないのを見て、はるかは不思議そうに言った。ガタガタと揺れながら登っていくゴンドラからの景色は、まさにシャッターチャンスではないかとはるかは思ったのだ。

「あ、やば」

瑞希はそう言って苦笑した。そうして言い訳みたいに何枚か、パシャパシャと写真を撮った。

「草苺さん相手だと油断しちゃうな」

「油断？ 何が？」

「別に写真、興味ないんだよね、ホントは」

「そう、なんだ」

忠弥坂の部活は全員入部必須だから、何かしらには入らなくてはならない。だから特にやる気のない部員というのはどこにでもいる。珍しくはない。はるかにしても、弓道部に入りはしたものの、取り立てて情熱をかけて取り組んではいなかった。

「これもお父さんのカメラでさ、貸してやるって言うから断れなくて。重いんだけど」

なるほど彼女が抱えるカメラは、いかに忠弥坂に裕福な家庭が多いとは言え、女子中学生が買いそうにはない一眼レフだった。

「私だと油断しちゃうって、どういうこと？」

「ああ、ごめんね、なんかすごい失礼な言い方だったね。別に変な意味じゃなくって」

瑞希はバツが悪そうな顔で言う。

「草苺さんは、なんだろう、隙を狙ってるような人じゃないと思ったから」

「……隙を狙う？」

「なんていうのかなあ、無理してハイセンスな写真女子のキャラを演じなくてもいい、っていうか」

「ハイセンスな写真女子のキャラ？」

はるかは、瑞希が何を言っているのか全然わからなかった。

「だからさ、私が別に写真好きなわけじゃないって、草苺さんにはバラしちゃったけど、草苺さんはそれを他の人には言わずにいてくれるでしょう？」

「言わないほうが良いなら、そうするけど」

「うん、そうして」

瑞希はファインダー越しにはるかを覗いて、シャッターを切った。

「え、急に撮らないでよ」

写真を撮られたのに遅れて気付いたはるかは慌てる。

「『きょとん』ってキャプションつけて、文化祭で展示していい？」

「や、やめてよ深水さん」

「瑞希でいい。私もはるかかって呼んでいい？」

「それは良いけど、写真はダメ」

その後の日中、はるかは上の空で過ごした。

集中して考えてしまったからだ。

草苺はるかは何も知らない。

さすがに皆が寝静まった頃、そろそろと部屋を抜け出す人影を目の端で追うと、はるかも布団から這い出した。昼間は初夏の陽気だった高原も、夜となれば底冷えする。カメラを抱えた女の子を追いかけてウッドデッキに出ると、身体の芯がぞわりと冷えた。

深水瑞希はカメラを抱え、写真を撮るではなく空を見ていた。のぼってきたばかりの欠けた月が、瑞希の降ろした黒髪を不思議な輝きに包んでいて、せいぜい何メートルかしか離れていない彼女を、宇宙の向こう側に望むような気がした。はるかは急に、自分もカメラが欲しいと思った。この光景を切り取れたならと思った。

「あれ、はるか」

気づくと瑞希がこちらを向いていた。

「見つかったか」

「……ねえ、瑞希」

はるかは今、人生の今までのどんなときよりも緊張して、必死に言葉を選んでいて。

「なあに、はるか」

「昼間、言ってたことの意味。私、考えたんだけど……」

ふふ、と瑞希が笑った。

「どうして笑うの」

「ごめんごめん、ふふ、だっておかしくって。そうだよ。はるかすごい考えてたよね。真剣な顔でさ。話しかけても上の空だし。お風呂ものぼせちゃうし」

はるかは赤面した。お風呂だって？　そもそも風呂に入った記憶すらなかった。

「あはは、で、考えて何かわかった？」

「……皆、お互いの隙を狙っている」

続けて、という顔で瑞希は微笑む。

「自分に設定した、キャラクターというか、自分らしさみたいなものが、本物なのか、偽物なのか、本当の自分を出しているふりをして、演技しているだけじゃないかって、お互い疑って、互いの本当を、見極めようとしている」

「それを、あなたは、考えてわかったの？」

はるかはゆっくりと頷いた。とんでもない大発見だった。入学式の日から感じていた周囲の大人さは、皆がそうあるべく自分を着飾っていたものだったのだ。しかもそうして、他人の仮面を暴こうと、笑顔の裏で虎視眈々と互いを狙っている……。

「普通そういうのって、考えてわかるものでもないと思うけど」

瑞希は呆れて言った。

「……はるかって、面白いね」

その声の仄暗さに、はるかはぎくりとした。呆れでも、軽蔑でもない、異様な感情が、その声音には、その一瞬だけ漂っていたのだ。それは嫉妬に他ならなかったが、はるかにはそれが何か、皆目見当もつかなかった。何しろ、その感情を、本当に差し迫ったその感情を、彼女はまだ知

らないのだから。

「ねえ、はるか。今度、二人で写真を撮りに行かない？」

「写真？」

「そう。結構楽しいよ？」

「さっき、ホントは別に興味ないって、言ってたじゃない」

瑞希の瞳の奥に、欠けた月が見えた。

「それも嘘かもしれないでしょ？」

草苺はるかは何も知らない。

深水瑞希はやがて不登校になった。名門、忠弥坂学園において、そんな生徒は稀である。しかし、ゼロではない。瑞希の家庭環境はもともと良好とは言えなかったが、彼女が中学に入ってからバランスを欠く状態だった。両親の不和は瑞希の精神にも大きく影響を及ぼし、彼女は学校生活に集中することは出来なかった。これが他の生徒だったならば、家庭で安心出来ない彼女が学校に居場所を見出すということもあったのかも知れないが、彼女の場合はそれも難しかった。なにしろクラスメイトが全員敵で、互いに騙し合っているという世界観に生きているのだ。気を許せる瞬間など、それこそ草苺はるかのような、何も知らない子と二人だけの時くらいだったのだろう。

教室に姿を現さなくなった瑞希のことを、はるかは初め、非常に心配した。長期で学校に来られないとはどういうことか、わからなかったし、不安だった。実際には小学校のクラスメイトにも不登校はいたのだが、はるかはそんな事覚えていやしなかったから、これは彼女にとってはじめての感情だった。担任に連絡先を教えてもらい、家に電話をかけて話してみた。瑞希は、ちょっと疲れちゃっただけ、すぐまた学校に行けると言う、と言った。はるかは安堵して電話を切ったけれど、待てど暮らせど瑞希は登校してこなかった。もう一度電話をかけようかと思ったが、なんと言えればいいのか、はるかはわからなかった。登校中に集中して考えすぎて、考えて考えて、三鷹まで乗り過ごして学校に大遅刻をした。それでもわからなかった。そんなに考えたのにわからないことなど初めてだった。

何も出来ないままに、何も知らないままに、草苺はるかは高校生になった。といっても、中高一貫だから、制服も変わらないし、キャンパスも変わらない。卒業式も入学式もない、と思っていたが、高校一年の始業式は少しだけ形式張ったお話があった。とはいっても内容は特に代わり映えしない、勤勉、温雅、聡明たれ、という話で、はるかはさほどの注意を払ってはいなかった。

だが。校長が何気なく言った言葉に。数字に。彼女は考え込んでしまった。

「この忠弥坂で共に学ぶ、学年239人の皆さんは」

なんだって。

239人？

草苺はるかは考える。集中する。頭の中の、生徒名簿を引っ張り出す。同じ学年の一人一人の名前を、名簿順にたどって、数を数えていく。数え終えたら逆周りでもう一度数える。クラスご

とに数える。三年のときのクラスごとに数えて、二年のときのクラスごとに数えて、一年のときのクラスごとでももう一度数える。部活ごとに数えてみて、クラスで分けずに五十音で数えて、順不同に思い出す順に数えてみる。

それでも数が合わない。240人いるはずだ。1人、減っている。考える。考える。考える……。

「草苺さん？」

声をかけられて我に返る。新しいクラスの担任が、講堂に立ち尽くす彼女を訝しげに見つめている。

「教室に戻りますよ」

「……先生」

「はい？」

「深水瑞希さんは、退学になったんでしょうか」

それが、彼女が考えて出した仮説。

「深水、瑞希さん？ ……ごめんなさい、誰だったかしら」

そして、考えたのに間違えた、はじめてのことだった。

草苺はるかは何も知らない。

クラスメイトに手当たり次第聞いてみたが、誰も深水瑞希という名前を、人物を、覚えてはいなかった。一年のクラスの友人や、担任すらも、知らないと言った。頭の中のではない、紙の名簿を手に入れて、上から下から斜めから何度も数えたが、239人しか載っていなかった。深澤百合の次は細田紫織だった。学年主任は入学時点から名簿に増減はないと言った。

家に帰ってベッドに横になり、彼女は考え続けた。深水瑞希はなぜ消えてしまったのか。そもそも存在したのか。本当に消えるということがあるのか。学校中が皆、彼女の存在をなかったことにしようと謀っているのだろうか。そうでなければ、全て私の思い違いで、深水瑞希は幻覚か何かだったのか。

翌朝になっても彼女はまだ考え続けていた。寝坊などしたこともない孫を、はるかの祖母が起こしにやってきた。

「はるか、どうしたの。具合悪いのかい」

はるかは答えなかった。まだ考えていたから。ちなみに、具合が悪いなんてことはない。草苺はるかは風邪を引かない子だったし、事実中学の三年間で遅刻こそ一度あったが、欠席したことはなかった。だから祖母も、何の悪気もなく、はるかが何か悪い状態にあるとは露程も思わず、部屋に入って声をかけた。

「ほら、学校に行かないと、友達が皆心配するよ。それか、忘れられちゃう」

忘れられる。

はるかは跳ね起きて、鏡を見た。酷い顔だった。初めて自分がどうやら泣いていたらしいと分かった。けれど、そんなことを気にしている場合ではなかった。学校に行かなければ。ともかく、学校に行かなければならない。そうしないと、忘れられてしまう。消えてしまうのだ。

確かに夏期学校で親しく言葉を交わしたし、あの夜の彼女の横顔を、よく覚えている。けれど、それ以降特に仲がよかったのかと言われれば答えに詰まる。写真を一緒に撮りに行こうとか言われたけれど、それは実現しなかった。一緒に遊んだことも、一緒にお昼を食べたことも、登下校が一緒になったことすら、なかったはずだ。だから深水瑞希がかわいそうだと思っているのではなく、私は、私も同じように消えてしまうのではないかというのが怖いのだ。草薙はるかは何も知らないが、そこまでは考えて分かることが出来た。そして、それがひたすらに、恐ろしかった。

2 (占)

初カキコ……ども……。

俺みたいな文系で基礎物理学実験とってる腐れ野郎、他に、いますかっていねーか、はは。

「三トさん、結果出た？」

コピペで現実逃避していた私に、実験ペアの草苺はるかが切羽詰まって言った。

「一応出た、けど……」

「いくつ？」

「マイナスになった。重力加速度が」

It's a true world. 狂ってる？ それ、誉め言葉ね。

基礎物理学実験といえば理系の大学一年生が大いに苦しむイニシエーションであり、そんなに大変なら私もやったら、と思って履修した。初回の実験からいきなり、現在進行系で苦しんでいる。そもそも物理、受験で使ってない。それでなんで取ろうと思ったんだ。どうも、こういう明らかに苦しそうなシチュエーションに自ら飛び込んでしまう悪癖がある。この間もゴスペルに興味ありませんか女に付いて行って散々な目にあったというのに……。

本日の実験テーマは催眠術だった。重力加速度という深遠なる物理学の真理定数を導出するため、魔術師のコスプレ（ヘルメットとシューズプロテクター）を身につけ、ひたすら巨大な振り子を揺らす実験である。効果は靦面、振り子が二往復する前に私は意識を失いかけた。振り子が十回揺れるのにかかる時間をストップウォッチで測らなければならないが、十回も意識が持たない。今何回目だったかすぐにわからなくなる。タイムショックか？ 測り始めたのは振り子が右にいくときだっけ、左にいくときだっけ？ その測定を、振り子をひっくり返したり重りの位置を変えたりして何度も何度も繰り返す。延々と。永遠に。帰りたい。死んだ目で測定結果をまとめて分析したら、重力加速度がマイナスになってしまった。なるわけ無いだろう。データ以前に式変形で失敗してるぞ。

「三トさん、どうしよう」

はるかが関数電卓を差し出した。

「ん、どしたの」

見れば、重力加速度の計算結果は $1 \cdot 62$ メートル毎秒毎秒となっていた。

「月面かよ」

「何度計算してもこうなるんだけど……」

「ちょっとジャンプしてみ」

草苺はるかは困り顔のまま、その場で飛び跳ねた。チャリンチャリン言わなかった。胸が結構揺れた。

「うん、意外とありそう」

「……何が？」

「重力。普通に地球並みのありそうだよ、この部屋。だからそんな小さい値になるわけない。計

算結果が間違ってるんだよ」

「でも式も間違っていないと思うし……」

草苺はるかとは私と同じ、文系のくせにこの科目を取っている奇特的な学生その二である。この二人だけが、そんな意味不明な履修をし、天罰とばかりにペアにされていた。

基礎実験はペア科目である。学籍番号順の連番で決まるペアが、すべてを決めると言っても過言ではない。作業からデータ処理からノート作成から口頭試問まで、すべての作業をペアで実施し、基本的にはそのままペアで評価される。相方が出来なかったり、途中で失踪したりすると悲惨である。だからある意味、微積すら怪しい私達二人がペアになっているのは、本業でやっている理系学生に迷惑をかけない正しい措置に違いあるまい。

「データ、取り直したほうがいいのかなあ」

もう他の学生は帰り始めている人もいる。少なくとももう誰も振り子を動かしてはおらず、せいぜい実験ノートの最後の仕上げ中、といったところだ。今から振り子をまたゆらゆらさせていたら、夜になっても帰れない。

「よし」

私は決然と言った。

「脳内で揺らそう」

信じられないことに、指導教官はデータの捏造を一瞬で見抜いたらしく、綺麗すぎるとか誤差の出方が都合良すぎるとか文句をつけてこちらの様子をうかがっていたが、私が知らぬ存ぜぬで通したところ、最後には実験ノートに判子を押してくれた。

「すごいな、そんなん分かるものなのかな？」

「何百っていう生徒の実験ノートを見てるんでしょう？ 捏造を見抜くテクニックがあるのかも知れないわ」

適当に、ランダムっぽく見えるように作った数が、末尾の数字が逆に偶然ではありえないほどバラけているとか、偶然ではありえないほど同じ数字が連続しないとか、そういう癖というものがあるとは聞く。その癖を読んで帳簿の捏造を見抜く凄腕が、税務署とかにはいるらしい。実験ノートの不正も似たようなメカニズムで見抜けるのだろうか。

来週の予習をしたいと草苺はるかが言うので、付き合っただけで大学内のカフェに来た。微妙に高いので、一人だったら入らないところだ。実際客層も学生よりむしろ近所の子連れ主婦が多い。私はカフェ・ウイナを、草苺はるかはアイスコーヒーを頼んだ。

「でも結構意外だった」

「何が？」

「三トさん、あんなズルするんだなって」

「褒めても何も出ないよ？」

「褒めてない」

まあ、研究不正防止というのは本学でも重点的な取り組み課題となっているところであって、その足元で学生がデータちょろまかしてたんじゃ困ったものだよねと思う。

「まあ、あんまり私、真面目とは言えないし……ごめんねえ、付き合わせちゃって」

「あ、いや、別に責めてるわけじゃないわ。私だって共犯なんだから。ただちょっと、珍しいなって」

「珍しい、ねえ……」

周囲を観察していた限り、私のように最終的に全データを捏造したのは大技すぎたにせよ、消したほうが都合のいい異常値を消したり、最後の方は回数減らして平均値がズレないようにデータを埋めたり、くらいのことをやっている学生は普通にいるように見えたが。まあ、それをわざわざ彼女に言うこともないけれど。

草苺はるかはちょっと真面目過ぎるように私には見えた。まあ東京の超名門私立女子校出身だというし……。地方公立出身の私とは、学校的なものへの真剣さに懸隔があるように思えた。

「珍しいと言えば、草苺さんはなんで物理実験なんて取ろうと思ったの？」

「ううん、物理学って、基本的には実証科学でしょう？ 単純に実験ができるっていうのも面白そうだけれど、分析や考察の仕方とか、勉強になることが多そうだなと思って……だから実験ノートの取り方の話とか、面白かった。全部一冊に書く、とか、消さない、とか」

草苺はるかは澄んだ目で宣った。私に流されたとは言え思いっきり捏造してきたばかりだということに、すごいこと言うやつだなと思った。

実験に先立って講義されたノートの使い方では、実験記録は一冊にすべて残す（別にメモ用紙とかを使わない）とか、訂正するときには二重線などで消す（消しゴムや修正液を使わない）とか指導された。そういえば、指導教員が私のデータの捏造をすぐ見抜いたのは、データが綺麗すぎたからではなく、ノートが綺麗すぎたからだなと今更ながら思った。余計なものを棄てたせいで、寄り道や悩みがノートに残っていなかったのだ。ただ、別に捏造しなくたって私は、基本的に書き損じるといことはないから、今後も面倒かもなと思ったりする。

「三トさんは？」

「私？ 私はただ、物理実験ってつらいついて聞いたから」

「どういうこと？」

「いや、どれくらい大変なのかなと思って」

草苺はるかは目をぱちくりさせた。

「三トさんって、ちょっと変わってるっていうか……私、いままであんまり会ったことないタイプの人も」

真顔でそんなことを言った。やっぱりなんかこう、世間ずれしてないというか。

「……草苺さんってさあ、いわゆるその、お嬢様系？」

「え、なにそれ」

「だって忠弥坂なんでしょ？」

「いやいや、全然そんな事ないよ。私、別に普通だし。親は学校の先生だから、別にお金持ちとかでもないし……。っていうか忠弥坂って別に、勉強できるってだけで、お嬢様学校じゃないから」

むしろ、自立した女性たれ、みたいな指導をされるの、と草苺はるかは言った。

「マクドナルドのハンバーガー食べたことある？」

「あるよ！」

「ロッターリアは？」

「ロッターリアは……ないかも……」

「お嬢様だ」

「なんでロッターリアで決まるのよ！」

「今度一緒に行こう。絶品チーズバーガー食べて驚くやつ、やって」

「そんなに美味しいの？」

「まあ！こんなに美味しいものがありましたのね！まさに絶品ですわ！みたいな」

「そんなテンプレお嬢様が来たらロッターリアのバイト店員も嬉しいでしょうね」

「そのまま店員をスカウトして草苺家の料理人に」

「バイトを連れて帰っても絶品チーズバーガーは作れないのでは……」

「これではダメね。お父様、ロッターリア社を買いましょう。その方が早く済みますわ」

「スケールが大きすぎる」

「ロッターリア再建の裏にはそんな物語があったんだね」

「ない」

「まあ、これから実験パートナーとして仲良くしよう。よろしくね。今度本当にロッターリア行く？実は私も毎日前通ってる割にはロッターリアって行ったことないんだけど」

「お嬢様か！」

意外とツッコミがしっかりしているのでお嬢様ではないようだった。

それから私達は出身地の話をし、住んでいる場所の話をし（草苺はるかはもちろん実家住まいだった）、他に取っている授業の話をし（草苺はるかは今学期27コマ履修していると言うので私は度肝を抜かれた。平日5日間、5コマ入れても25コマにしかならないのに、何が起きているんだ？分身でもするのか？）、他愛もない会話でコーヒーも水もなくなった頃、少しだけ言い訳のように予習をした。

途中、何度も私は「三トさん」じゃなくて「みとはち」と呼んでくれと言ったけど、草苺はるかは昔飼っていた犬がハチという名前だったからなんだか笑ってしまうと言ってなかなか「みとはち」を使ってくれなかった。名字が嫌なら八恵って呼んでもいい、と聞くので、そんな事言われたことがなかった私は若干恥ずかしいと思いつつオーケーしたが、結局その後も気付いたら「三トさん」と呼ばれていた。なにそれ。

私たちは、また来週、と言って別れた。

3 (占)

二回目の実験はサボった。

雨が降っていたので。

入手した情報によれば、実験は一回欠席すると良、二回欠席すると可、三回欠席すると単位は出ないそうだが、逆に言えば二回までは欠席しても単位がもらえるということになる。あとは雨が續かないことを願えばいいということだ。本当か？

ちなみに雨が降っていたというのは嘘なので、私はベランダに干した洗濯物を取り込んでいた。だって毎日大学に行ったら洗濯物干したり取り込んだりする時間なくない？ 秋の柔らかくて高い空を見上げて、私はしばらくぼうっとしていた。

.....草苺さんにはちょっと申し訳ないが。

入手した情報によれば、欠席者がいた場合は適当なペアに混ぜて三人で実験をさせてくれる場合が多いようである。それならそこまで大きな迷惑でもあるまい。ああは言ったものの、毎週予習復習とか、面倒だし、こういうサボり癖のある人間だよというのを早めに知ってもらったほうが、お互い過ぎしやすい。何度か携帯が鳴っていたが、無視した。

私は眼鏡を上げた。ぼやけた視界の向こうでは、何もかもが曖昧になる。見えすぎてしまう私の周りには誰も寄り付かなかったけれど、視えない私でも結局何も変わらない。私のほうが周りを遠ざけている。模糊とした世界との距離は縮まらず、けれど大学生という身分はそれもまた楽で。秋の空は何も言わず、夕焼け一步手前で優しい表情で私を見つめていた。サボっても咎められない。素晴らしい。

「おーい」

.....ん？

「三トさーん」

はあ、とベランダから下を見れば。

「三トさん、大丈夫？」

声を張り上げているのは、他でもない、草苺はるかだった。

「え、なんで」

口の中でつぶやいた。きっと彼女には聞こえない。

「どうしたの？ 今日実験来なかったから、心配で」

「や、どうしてここが？」

家の住所なんて教えてない。

「ああ、それは」

草苺はるかは何でもないように、大声で言った。

「考えたから！」

部屋に入れて聞けばこうだという。まず最寄り駅までは初対面の時に話題に上がったので、そこまでは知っていた。東口を出てすぐのところにロッセリアがあるので、駅の東側のエリアに住

んでいるとあたりをつけた。あとは大学生が一人暮らしできそうな物件というといくつか候補エリアがあるが、三トさんなら駅から近いとかコンビニに近いとかいう条件を重視しそうだと考え、多少絞り込みをかけた。ここまで考えた上で実際に駅に到着し、適当な方向に歩きながら考えを続けた。先週見せてもらった三トさんの今学期の時間割は、履修数は多いにもかかわらず月曜日の午前をまるっと開けていて、理由は「寝たいから」とのことだった。しかし歩いていて看板が目に入ったが、今歩いているこのエリアは月曜に可燃ごみの収集がある。そうすると月曜はゆっくり寝てられない。前日夜に出せるタイプのゴミステーションがあるような良い物件には住んでいないだろうし。そこで月曜が収集日になっていないエリアを探して歩いたところ、ベランダで呆けている私を発見したのだという。

「なにそれこわい」

「まあ、要はたまたま辿り着いたってことよ。そんなことより」

そんなことよりじゃないぞ。そこまで絞り込めた、現に辿り着いた、というのも怖いし、最終的に見つかる保証が一切ないのにとりあえず来てしまう行動も怖い。春からこの家に住み始めたけれど、客を入れたことはない。はじめての客人が、まだ一回一緒に実験実習をただけの女の子で、家の場所を教えていないのに押しかけてきた。そんな未来は聞いてない。それは書かれていない。なぜ私はこれを予見しなかった？

「どうして今日、実験に来なかったの？」

草苺はるかは真顔で言った。

「ああ、ごめんね……」

「ごめんじゃなくて。どうして？」

目が据わっていた。怖い怖い。

「その、ちょっと体調が」

「体調が？」

恐ろしく冷たい声だった。どこから出ているんだ。

「体調が、悪かったというわけでは、特にないんですが……」

すう、と、草苺はるかは目を細めた。

「つまり……サボりね」

「は、はい」

草苺はるかはそこで黙って、何かを考えていた。私は判決を待つ容疑者みたいに硬直していた。どうしてこんな事になっているんだろう。同級生に説教されたことなんて、私にはない。それどころか、高校まではどちらかと言うと……恐れられていたから、上から目線で私に物を言う人間は、いなかった。

「ねえ、八恵」

「ふあい」

急に下の名前と呼ばれて、変な声が出た。

「お願いだから、学校にはちゃんと来て」

そう言って草苺はるかは身を乗り出した。

「え、うん、ご、ごめん」

なおも彼女は、頼み込むように言う。

「せめて連絡が通じるようにして欲しいの。電話も出ないから、心配で」

「ごめん……」

そう言って顔をあげると、草苺はるかは顔をクシャクシャにして、涙ぐんでいた。先週初めて会ったときは凜として大人びた、端正な顔立ちだと思ったのに、それが台無しだった。私は慌てた。いくらなんだって、私が一回サボったくらいで、そこまで思い詰めるだろうか？

この草苺はるかという人間が特殊なのだろうか。

あるいはこれが、遠く東京に出てきて眼鏡をかけた効果、なのだろうか。

この子は一種異様だと思うけれど……今までに会ったことのないタイプには違いない。

「でも良かった。八恵が消えてしまわなくて」

はるかはポツリとそうつぶやいた。私は消えるだなんて大げさなと思った。

そうしてその日のことを、草苺はるかのことを、日記には書かなかった。

4 (占)

全身の皮膚があちこち痛み、骨は軋んで悲鳴を上げ、服は汗でぐっしょり、靴には吐瀉物が飛び散り、眼鏡はひん曲がって、それはもうとんでもない有様だった。

四字熟語で言うと満身創痕。

熟語じゃない四字でいうと死にそうだった。

一瞬の出来事だったように思える、あの蛇との死闘———というか、私が一方的にやられていただけだから、死闘というより蹂躪———は実際には意外と長かったのか。あるいは意識を失っていた時間が長かったのか。時刻はもう午前三時過ぎになっていた。当然、終電はない。

混乱して疲弊した頭は難しい解決を選べない。私はふらふらと身体を引きずって歩き始める。歩いて帰ろう。自宅まで、歩いて一時間かからない距離である。といっても、この脚じゃもう少しかかりそうだ……。

「おい、歩けるのか」

声に振り返るだけでも首筋に痛みが走る。見れば劫くんが戻ってきていた。もう目は光っていない。

「なんとか……」

「送ってやる」

なんだ、優しいじゃないか。姉ちゃんの方とえらい違いだな。

「このままお前に行き倒れられたら、お姉ちゃんだって迷惑だからな」

「……そういうのは、最初に『勘違いするな』とか付けるともっと良くなるよ」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

夜の交番に仄明かりが見えた。あんまりにもあんまりな恰好なので、職質とかされると大変だ。警官に目をつけられないよう、私は脚を引きずり引きずり、できるだけ早歩きでその前を通り過ぎる。昼間は車の行き交う大通りだが、さすがにこの時間は車通りもまばらだ。

「無量さんと劫くんは、なに、反体制の妖術使いとかそんななの？」

少年はこちらを気遣いながら、時折ふらつく私を支えてくれる。私はまだ混乱の渦中にあっただ。

「まあ、それでも間違っていない。お姉ちゃんは普通に、人間だけど」

それはつまり、言い換えれば少年は普通の人間ではない、あるいは普通に人間ではないということになるけれど。いまの私は露骨にそれを掘り下げる元気がない。

「あの人は一体何者なのかなあ」

なんだか知らないが、いろいろ知っているし。私のことや、はるかのことまで。

「……あの人は物語り」

少年がつぶやいた。

「物語？」

言って私はまたふらつく。少年が肩を支えてくれる。私より一回り小さいはずのその身体が、

がっしりと心強い。

「物語じゃなくて、りを送って物語り。その名の通り、物を語る仕事だよ」

物を語る。語り部みたいな？

「近い。物語りの源流は稗田阿礼にある。だから語り部から派生した役割とも言える」

「はあ」

語り部というと、古伝承を語り継ぐ人だが、あの人が一体何を語り継いでいるというのか。

「昔話をするとか、そういうことじゃない。物語りってというのは。物語りは、物語を他人に語ることで、作用を及ぼす」

「作用？」

「人を動かすってことだ」

物を語って、人を動かす。

「お前も動かされたじゃないか。『蛇塚』の話に」

ぶん殴られたような気がした。動かされてる？ 確かに私はあの話を聞かされて、それが原因で巡り巡ってこんなひどい目にあっている……。そういうことか？

「ところで、草苺はるかっていうのは、この間の病院で寝ていたやつだろ？」

唐突に劫くんが言った。車が一台、ハイビームをぎらつかせながらやってきて、私達二人を照らしてすれ違う。目の奥がぼうっと紫色にあてられて、平衡感覚がまたも持っていかれる。

「そうだよ」

「じゃあ、お前の家にいるのは誰なんだ」

それも、草苺はるかだ。

ドッペルゲンガー……？

「つまり、草苺はるかは病気か何かで意識がない状態で入院していて、その代りに出現したドッペルゲンガーが、お前の家に住んでいる」

「まあ、そういうとこ」

「本人は気付いてないのか？」

「……多分」

多分、草苺はるかは何も知らないのだ。

半年前のあの日、授業が終わった教室で、はるかは呆然としていた。その虚ろで混乱した目は、まるで魂が抜けたみたいだと思ったけれど、今考えればそれは逆で、魂だけが抜けてきてしまった顔だった。話しかけても会話はうまく成立しなかった。霞の向こうの、致命的にズレてしまった向こう側の世界と会話をしているようだった。鏡の国の物理法則はこの地球と違って、私達は通じ合えないのだ。私は狂った眼鏡を外して、直接彼女を覗き込もうかと思った。逡巡した。けれど結局それはしなかった。それだけは駄目だと、彼女だけは見てはいけない、視えてはいけなと決めていた。通じない会話を続けて、ただわかったのは、彼女が何かを恐れている、そして家に帰れないと主張していることだった。それで私は、はるかを部屋に連れ込んだ。実家で家

族と何かトラブルでもあったのかも知れない、一晩泊まっていけば落ち着くだろう、ちょうど金曜日だ、何なら土日はうちにいてもらっても良い。そう思った。

翌朝、はるかはなかなか目を覚まさない。正確には、起きようとしなかった。具合がわるいのかと問えば、そうではないようだった。しかし、起きたくないのだという。私はベッドサイドで本を読んでいた。背中にはるかの存在を感じながら、けれど何もしてあげられずにいた。時折はるかは寝返りをうつだけだった。子供が拗ねているみたいだと思った。

「いい、はるか。もう目は覚めてるんだろうから聞いて」

正午を回った頃、私は言い渡した。

「いま起きるなら。いま起きるなら、どうして家に帰りたいのか、私もう聞かない。詮索もしない。帰れるようになるまで、ここにいていい。ちょっと狭いけど、はるかさえ良ければ何日でも泊まっていって大丈夫。だから機嫌直して、起きて欲しいな」

ベッドにうづくまるはるかはじっとしている。

「いまから卵ハムチーズホットサンドを作るよ。庶民の味だからお嬢様の口に合うかは分からないけど、できるまでに起きて、一緒に食べよう」

そう言って私はキッチンに向かった。

ホットサンドが焼ける頃、そろりとはるかが顔を出した。背が高いくせに、小動物みたいな動きだったので、笑ってしまった。

以来、彼女はずっと私の家に住んでいる。毎朝のように、卵ハムチーズホットサンドを二人で食べている。

「お前は どうやって気付いた？」

そうだ、お前は どうやって気付いた。お前は どうやって、知ってしまった。

「知りたくないのに、視えてしまったから……」

眼鏡を外して直視することだけは絶対にしなかったし、日記にも意識的に書かないようにしていた。けれどある日、病院を訪れる自分が視えてしまった。心当たりはなかった。軽はずみに、実際にその病院に行ってしまった。待合室でぼんやりしていると、彼女の名前が聞こえた。その時はわからなかったが、彼女の両親の会話だった。ふらふらと二人についていった先に、草薙はるかの病室があった。

なにが視えてしまった、だ。自業自得ではないか。私はそれを知っている……。

「はるかは、学校を休む事を変に嫌がってたから、多分自分が倒れて、学校にいけなくなっているという状況が許せなかったんだと思う」

それ以上のことはよくわからない。私は理由を聞かないと言った。詮索しないと言った。それなのに、彼女が肉体から抜け出しているということを知っているだけでも大罪だ。

「それでドッペルゲンガーが？」

「ドッペルゲンガーというより、生霊とか、幽体離脱みたいなものかもしれない……」

それでも彼女は幻覚ではない。私にしか見えないというわけでもないし、実体がある。けれど、私は怖い。いつ彼女が消えてしまうんじゃないかと、怖い。

「菊花の約……」

少年がつぶやいた。

「雨月物語、だっけ」

「そう」

「どんな話だったっけ」

頑張れば思い出せるような気もしたけれど、私はそう言った。

「聞かせてよ」

劫くんはしばらく目を揺らしていたけれど、ゆっくりとそれを、語り始める。私は痛む脚を引きずりながら、劫くんの肩にほとんど掴まりながら、その声に、その語りに耳を澄ます。

菊花の約。雨月物語巻之二。

清貧潔白の学者、丈部左門は、偶然に病に倒れた武士の看病をする。武士は赤穴宗右衛門といい、故郷の出雲国へ戻る途中であった。出雲の主であった塩冶掃部介が、尼子経久の謀反により討たれたとの報を聞いてのことだ。左門の献身的な看病で、やがて宗右衛門の病は快方に向かう。宗右衛門は左門の献身さに心を打たれ、一方の左門も諸子百家について宗右衛門と語らううちにすっかり意気投合し、深く通じ合った二人は義兄弟の契りを結ぶ。やがて、宗右衛門は出雲に向かって旅立つが、いつ戻るのかと頻りに問う左門に、菊の節句の日に再会しようと約した。さて、季節は夏から秋へと過ぎ、菊の節句がやってくる。左門は朝から準備をして待つが、日が暮れても宗右衛門は現れない。夜になってやっと、黒い影を纏った男が現れ、それが宗右衛門と知れる。左門は躍り上がって喜び、宗右衛門をもてなすが、宗右衛門の様子はどこかおかしい。訝しむ左門に、宗右衛門は、自分はもはやこの世の人間ではない、穢れた死霊であると告げる。出雲の国に帰った宗右衛門は、尼子経久によって監禁され、城を出ることは叶わなかった。このままでは左門との約束が果たせないと悩む宗右衛門は、「魂は一日に千里を行く」という言葉を思い出し自ら命を絶ち、陰風に乗って駆けつけたのだった。それを話すと、宗右衛門はかき消すように見えなくなってしまった。左門は嘆き悲しみ、単身で出雲へと向かい、宗右衛門の敵を討つ――。

「いや、でもこの物語は、草薙はるかとは違う」

少年は言った。

1. 草薙はるかは死んでいない。宗右衛門は左門のもとに駆けつけるために死ぬ必要があったけれど、草薙はるかは、意識がないとはいえ死んだわけではない。
2. 草薙はるかの魂の方は、自分が身体から抜け出していることに、気付いていない。宗右衛門と違って、自らの状況は何も知らない。

「お姉ちゃんなら、もっと良い物語が選べるはずなんだけれどな……」

少年は、悔しそうにそう言った。私は苦笑した。

「君がそんな風に、私とはるかのことを心配してくれるなんて嬉しいなあ」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

「別に。そういうわけじゃない」

微かに空が白んでいる。夜明けが近い。家も大分近くなってきた。

「俺たちのためにずいぶん働いてくれたから、貸し借りの無いように考えてただけだ」

「そういう意味じゃ、ものすごい貸しだと思うけどねえ、これ」

それくらい身体はボロボロで、精神もズタズタだ。まあ、突っ込んでいった私が悪い。そう思うことにするけれど。

「でも、お姉ちゃんはきっと、何かを用意していると思う」

少年は静かに言った。

「じゃあその見返りを、楽しみにするよ」

最寄り駅までついたところで、劫くんとは別れた。あと少しだから、自分で歩けると私は言った。ここからなら劫くんは始発電車で帰れる。少年は何か言うかと思ったけれど、素直に頷いて、気をつけて、と言った。私はもう一度、ありがとうと言って、歩き出す。彼は電車なんかに乗るのだろうか？ 山手線に乗っていたら、それこそ見た目、塾通いの小学生だな。

湿っぽい朝の空気が、乾いた喉をザラザラ撫でる。私は帰らなければならない。私は帰ることができる。帰ったら部屋に、はるかがいる。はるかに会わなければならない。

劫くんにも肩を借りながら、そのボーイソプラノの静かな語りを聞きながら、私は決めていた。はるかにすべて話すのだ。

はるか二人暮らしさせることの楽しさと、自分だけがはるかの秘密を知ってしまったことの後ろめたさで、私は何も言えずにいた。黙ってやり過ごして、物事が自然に解決するのを祈っていた。そんな解決はないと知りながら。

私は自嘲する。燈花ちゃんに、話せ、直接言え、と言ったのを思い出す。そうだ、私もそうしなくてはならない。たとえそれが、すべてを壊すことになったとしても。はるかを、はるかとお過ごしたこの半年を、消してしまうことになったとしても。それでもはるかは、宗右衛門と違って、死んではいない。はるかが生きて目覚められるなら、その可能性にかけろべきだ。

玄関の扉の前で深呼吸。もうはるかは起きているだろうか、まだ寝ているだろうか。微妙な時間だ。早起きの彼女だから、もう起き出してもおかしくはない。できれば先に着替えてシャワーを浴びたいところだけれど、起きていたらこの格好のまま、話をするしかないだろう。きっとはるかはすごい顔をするだろうな、と思って私はふふと微笑んだ。

そっと、できるだけ音を立てないように、玄関のドアを開ける。身体を滑り込ませ、後ろ手にドアを閉める。トーストの焼けるにおいがする。居間の灯りはついている。はるかはやはり起きているのだろう。しかし姿は見えない。洗面所にいるのか。しかし何も物音はしない。

「ただいま……」

小さく言ってみる。

返事はない。

よそよそしくも私の声は吸い込まれ、キッチンの窓に差す陽光が白々しく朝を演出している。靴を脱ぐ。靴下がべっとりと汚れているので部屋に上がるのを躊躇する。しかしどうにもしようがない、靴下も脱いで、裸足で部屋に上がる。

誰もいない。

洗面所を覗き、寝室を覗き、トイレを覗いて、しかし、誰もいない。

草苺はるかはここにはいない。

草苺はるかがここにはいない？

キッチンにトースターから飛び出したままの食パンがある。フィルターがセットされコーヒーの粉が入った状態で、乾いたままのドリッパーがマグカップの上に置かれている。電気ケトルの中には熱いお湯が入っている。どう考えても、ほんのすぐさっきまで、ここには草薙はるかがいたはずだ。

忽然と、草薙はるかは消えてしまった。

私は半狂乱で、もう一度靴を履いて飛び出そうとするが、足がもつれて倒れ、三和土に強かに頭を打ち付ける。激痛で世界が遠ざかり、私は自分が、それを失いつつあることを意識する。

今朝もイエローのアクアは快調に走った。狼もどきと狐のクォーターを乗せて。

宇都宮を過ぎてから、車線が2本に減っている。直線が多くて走りやすそうだが、あまり面白みのない道ではあった。道路の外には木々が繁茂しているが、それが目隠し代わりに残されているのか本当に森なのか、区別はつかない。……いやまあ、普通に目隠しと防音だろうな、と思い直す。梅雨の合間の青空は儂げで、遠くに薄く、名前の知らない山々が見える。カーラジオが知らないアーティストの紹介をしている。

東京からだんだんと離れていくことに、今更のように不安な気持ちが膨らんで来た。

その北海道の神社とやらが本当に助けてくれるのだろうか？ 燈眞さんが見つめてきたのだから、大丈夫だと思いたいけれど……。そもそも僕の狼を外してしまったら、火鼠はどうなるのだろうか。もともと、成人すれば自然に外れる、という話だったけれど、本当にそうってくれるのだろうか。狼から解き放たれて、またあの時のように、炎を滾らせたりしないだろうか。

僕は公安に追われているというけれど、本当に朝の移動なら安全なのだろうか。本当にあの御札を貼ってホテルに引きこもれば安全なのだろうか。これも、燈眞さんがそう言ったのだし、なにより娘の同行を許しているのだから、それなりに安全性がある方法なのだろうと、冷静に考えればそう思うけれど……。それでも得体の知れない力に追われているというのは、気分の良いものではない。頭が大丈夫だと思っても、胃と心臓は違うと言っている。

この感覚を、知っている。

中学生の時に、お前には火鼠が憑いていると言われ、お前は追われていると言われた、あの時と同じ。

その時。

フッ、と、運転席の燈花が噴き出した。

僕は全然聞いてなかったけど、ラジオで流れていたCMで笑ってしまったらしかった。何のことか分からないがつられて僕も微笑む。見れば燈花はすぐに真面目な表情に戻っていて、姿勢を正してハンドルを握る姿がなんだか安全運転と顔に書いてあるみたいで、今度は僕が噴き出してしまう。

「何が可笑しいんですか」

それで僕は気づいた。

あの時とは違うんだ。あの時も僕はこうして助手席に座っていたけれど、いま運転席に座っているのは、怪しい事案おじさんじゃなくて、燈花なんだ。さすがに怪しい事案おじさんってなんだよ。

車の中は不思議と自然に会話が出来た。僕が引きこもっていた間の燈花の話を聞いた。この間、色々調べたとは聞いていたけれど、僕の中学までわざわざ調べに行ったというのは聞いてちょっと怖かった。愛が重い。僕は中学生のときの怪火事件の話をした。概ね、燈花が調べた内容であたっていたらしくて、それも怖かった。燈花は金沢の町並みや食べ物の話をした。その話は結

構盛り上がった。僕はもっとおすすめの場所があるから次は一緒に行こうと言った。燈花は是非お願いしますと言った。ホテルの部屋に二人でいるより、車の中のほうが会話が弾む気がした。同じ方向を向いて横に座っているからかも知れない。

自然に会話は出来たけれど、僕はまだ、自分の中で燻っているものがあつた。

この件を片付けたら、もう一度しっかり言うんだ、金沢に帰るのも良いだろう、と僕は思った。けれど、それを考える度に胸がズキンと痛む。この件を片付けたら。この件を片付けるということは、つまりそういうことだけれど。そのとき。狼を失ったそのとき。燈花はまだ僕のことを見てくれるだろうか？

7 (狼)

「燈花、あの」

「なんですか」

「今日は、部屋を別にして欲しいんだけど」

燈花はこの世の終わりみたいな顔で僕を見た。

「この世の終わりみたいな顔で見ないで」

「この世の終わりです……」

「どうか終わらないで」

「香織は私と一緒にベッドで寝たくないのですか」

「直球で言わないで」

「私は一緒がいいです」

「照れるから」

「私は！ 一緒が！」

「声が大きい」

(ファミチキ……)

「脳に直接」

「どうしてですか」

「いや、その……今日は」

この一ヶ月は、ものすごく濃密だったような気がする。いや、うち三週間くらい引きこもっていたんだっけ？

「ああ」

燈花にそれは伝わる。皆まで言わずとも。

「今日は満月、ですね」

*

弘前公園の近くの小さなホテルに二部屋取った。ベッドで部屋が埋まっている、なんの代わり映えもしない、ジャパニーズウサギ小屋ホテルだった。ベッドに二人で腰掛けるとそれだけで満員感がある。

「なんですかその、せっかく二部屋とったのになんでここにいるのみたいな目は」

「そんな目はしていない」

問題は夜なのであって昼は大丈夫ですねとか言って、結局燈花は僕と一緒に部屋にいた。少し早いが二人で晩御飯を食べる。と言っても適当なコンビニのお弁当なのだが。気分転換にご当地の美味しいものでも食べたいが、何しろ朝しか外に出られないので、こうになってしまう。そろそろこの食生活にも飽きてきた。車に乗ってホテルの部屋にこもってという繰り返しで、運動もしないから（しないから）、お腹もあんまり空かない。燈花はそうでもないようだが。燈花は普通

に弁当を食べ終えたと思ったら、カップ焼きそばを取り出した。

「え、それ今食べるの」

「はい、そうですが」

「なんか夜食とかなのかと思った」

「腹が減っては何とやらです」

「何だよ」

戦でもするのか？

「え、いま食べたらずいですか？」

「いや……多くない？」

「多くないです。だって、そもそもカップ焼きそばって、何がカップなんですか？」

「話を逸らすな」

「逸してません。何がカップなんですか？」

逸しているだろう。

「いや、入れ物がじゃないの」

「これカップって言いますか？」

「うーん」

確かに単体でその入れ物を出されたらカップとは言わない気がする。四角いし。

「で、カップ焼きそばって、何が焼きなんですか？」

「は？」

「お湯を入れて作るわけですけど……何が焼きなんですかね」

そう言われてみれば確かに、焼く工程はどこにもないな。工場で焼いたものが入っているというわけでもないし。

だが、そこまで考えて、僕はこの疑問の行き着く先を直感する。

「それで、カップ焼きそばって、何がそばなんですか？」

おいおい。まさか。

「いや、その麺が……」

「蕎麦っていうのはですね、香織も知っていると思いますが、タデ科の穀物です。小麦粉から出来た麺を蕎麦っていうのは変でしょう。小麦はイネ科です」

「確かにそうだけど……燈花まさか……」

「そうです。これはカップでもなく、焼きでもなく、そばでもない」

そう言って燈花は湯切りしながら、不敵に微笑んだ。

「つまりこれは……無です」

「無」

「ゼロカロリーです」

ゼロカロリーではなかった。

「607キロカロリーって書いてあるだろ」

その熱量は、小さな体のどこに消えるのか。案外本当に無なのか。

僕は食後の薬を取り出して飲む。

「その薬、先月も飲んでいましたが、それは狼の薬ですか？」

燈花が言う。

「うん、鷲家口の丸薬、って言うらしいんだけど」

「あのときは狼になることを防ぐ薬なのかと思いましたが、逆なんですよね」

さすが、燈花はそういうのはすぐ分かってしまう。僕の意識に登ったことは、だいたい読まれてしまうらしい。

そう、これは狼化を促進し、スムーズに変化できるようにする薬だ。

「それも藤木先生が用意しているのですか」

「そうだね、藤木先生から送ってもらっている」

「そのあたりが解せないのですが」

燈花がカップ焼きそばをもぐもぐしながら言った。いや、無をもぐもぐしながら言った。

「解せない？」

「なんでわざわざ狼になるのですか」

燈花の咀嚼音だけが妙に部屋に響いた。

「いや……だから、怪火封じのために」

「薬を飲んでまでですか？」

燈花の言うことは分かる。

「狼にも定期的に活動する場がないと、力が弱ってしまうらしくって、だから濃度を適切に保つために月一度の変身が必要らしいんだ」

「それホントですか？」

「え……」

「そもそもですよ。なんかもっと楽な解決策はなかったんですか」

「だから、言ったじゃん、最初はそのつもりだったけど、怪火が強くなりすぎて、このまま単純に切り離すのは危険だからって言って、年月をかけて狼に抑えつけさせるしかなくなったんだよ」

それは僕のせいだ。所構わず火をつけてしまった、僕の潜在意識のせいだ。

「それは誰の説明ですか？」

「え、藤木先生」

「藤木先生は専門家なわけでしょう。もっと良い方法があると思うんですが」

そう言われると、そんな気もするけれど。

「それにその狼は、一体何モノなんですか？」

「どういう意味？」

「火盗除は確かに狼の持っている属性ですが、そういう日本の狼に、『満月になると覚醒』とかそういうの、おかしいでしょう。それに御札に書いてある絵も、なんだか日本のお犬様と西洋の人狼を混ぜたみたいで、まるで現代に作ったみたいなんですよ」

さっきから燈花が挙げる疑問は、当然のものだ。実際、ほとんど同じことを、僕は昔藤木先生に聞いたことがある。

「うん。現代に作られた妖怪だって言ってたよ。人口に膾炙したイメージを使ったほうが、効果が高いからそうしてあるんだって」

燈花は目を細め、疑わしそうに言った。

「都合が良すぎる」

そう言われても。現にそうなのだから。

「しばらく藤木先生には会ってませんが、その話を聞いて、なんだか信用できなくなってきました」

「あの人は変な人だけど、別に僕を騙してるってことはないと思うけどな……」

「どうしてですか」

「中学の時から、ずっと面倒を見てくれているよ。僕が東京の高校に出てこられたのも先生のおかげだし……」

実際、何から何までお世話になっている。直接お金をもらってこそいないものの、奨学生で高校に入れたのも先生が手引きをしたんだと思う。大学に入ってから減ったけれど、高校の頃は時々ご飯に連れて行ってもらった。父親代わり、と言えは言い過ぎだけれど、所詮は火鼠の件の負い目かも知れないけれど、あの人は僕にそんなに悪い感情は持っていないと思うのだ。事案おじさんでこそあれ。

「へえ……」

燈花がカップ焼きそばのカップを握りつぶして捨てた。いや、無のカップを……無の無を？

「やはり藤木は信用なりません」

「え、呼び捨て？」

「やつが娑婆に出てくる前に片をつけましょう」

「急に敵意出すぎだろ」

「明日の朝はぶっ飛ばしますよ。いよいよ本州脱出です」

ぱちんと燈花は手を打って、自分の部屋に引き上げていった。怖いわ。

香織の部屋を出た私は、ドアの外側にも御札を貼り付けました。さすがに悪目立ちするので、上から「起こさないでください」の札をつけて隠しておきます。

明日の朝はぶっ飛ばします、などと言いましたが、実際には今夜こそが山なのです。

今夜、香織は狼になる。怪異に化ける。

目くらましの御札を使っていると言っても、本格的に彼女が向こう側の状態では、狩人がいつ踏み込んできてもおかしくはありません。今夜が最大のリスクです。

私は駐車場に降り、きつね色のアクアの後部座席から、小ぶりのスーツケースを取り出しました。リモワの限定のイエローのやつ。母から借りたものです。ガラガラと引きずって、自分の部屋に戻ります。狭い部屋なのでスーツケースを広げる十分なスペースがなく、若干いらつきますが廊下のところで中身を広げます。いや……このスペースは廊下って言えるんですかね？ ユニットバスを部屋から切り取った結果必然的に発生してしまったスペース、くらの雰囲気ですが……。まあ良いです。取り出したアイテムをベッドの上に並べます。

これが私の秘密兵器です。まあ全部、父からの借りものですが。まずはパッと見は普通の紐ですが、伝説の宝具であるところの魔紐。同じく単なる年季の入った扇子にしか見えませんが、由緒ある陰陽師アイテムである扇子。次にこれは小さなポーチに入っていますが呪的逃走三点セット。さすがに呪的逃走三点セットって。

やってやろうじゃないですか。

付け焼き刃に違いありませんが、私が香織を守るのです。

と。

聞こえてきました。

グルルル、という低い唸り声。隣の部屋から微かに聞こえてきます。音響遮断効果があってもこれくらいは聞こえるのですね。反対側の部屋の人はお気の毒ですが……。

時計を見るとそろそろ真夜中です。窓の外には満月が浮かんでいます。

詳しくは聞きませんでした。狼になっているときの香織は、意識はあるものの、短絡的になったり攻撃的になったりするようだ、とのことでした。別に完全に意識が動物になってしまうわけではなく、ですから自分の身体を拘束したりする必要はまるでないのですが、自分のことが信用できない彼女は毎月自分の体を拘束して夜に臨み、満月を望むのだそうです。

しかし、今日は、拘束は無しでお願いしてあります。本当にいざというときは、逃げ出す必要があるわけで、拘束なんかされていたら面倒この上ない事になってしまいます。香織がホテルの備品を破壊しないかだけが心配ですが……。

私はもう一度、香織の狼のことを考えます。私が自分勝手にも香織の素性を調査し、みとはち

さんの前で披露した推理は、結局の所ほとんど正解でした。やはり、怪火憑きであった香織の怪火を封じるために、あの狼は道具として導入されたのです。けれど今ではこの話に、私は言いようのない不審を感じざるを得ません。その狼の提供者に対する不信を、感じざるを得ないのです。

私達の研究室のボスにして。

西洋の半人半獣伝承、特に、人狼の専門家。

藤木圭吾先生のことを、私はそれほどよく知りません。ただ、先生が香織を見る目は、どこか親密な色を帯びていたことははっきり思い出されます。二人がもともと知り合いであるということまでは、最初から気付いていました。けれど、それ以上の関係がどうだったのか、そこまで私は読み解こうとせず、すぐに先生は海外に行ってしまったのでした。

先生の正体と過去を、一度洗い直す必要があるでしょう。素性の調査を誰かに依頼しましょうか。香織に狼を背負わせた件も、香織本人の話を鵜呑みにせずに、もう一度調査すべきです。コピーしてきた新聞記事などの資料も、実は一式持ってきてありますから、明日にでも読み直してみましよう。今夜はそれどころではありませんが.....。

隣の部屋から、グルルルル、という低い唸り声が続いています。私は今夜使いそうな装備を全部リュックサックに移し終えて、すぐに背負えるようにしておきます。邪魔なスーツケースは閉じて、窓のように寄せておいて、ベッドに腰掛けてスマートフォンで地図をチェックします。逃走経路をいくつかのパターンでシミュレーションします。

しかし逃走といっても、車は使えないのです。市内は少しは交通量があるでしょうし、信号もありますから、簡単にはスピードが出せません。狩人に簡単に追いつかれます。かといって無理な走りをすれば、普通の警察に追われる事になってしまいます。狩人は朝になれば追跡をやめるでしょうが、警察に手配されてしまったらおしまいです。一方で、じゃあ車を捨てて他の手段で逃げるかと言うと、それもまた悪手です。まだ先は長く、移動手段は絶対に必要です。レンタカー借りるという手も無くはないですが、できれば我が家の愛車をしっかりと父に返したいものです。そうなると、今夜狩人に襲撃を受けた場合、車は使わずに一旦狩人から逃げ切って、そのあとで車を回収してこの街を脱出する、というのが現実的なプランでしょう。

いや、何が現実的なプランだというのでしょうか.....。それって厳しすぎやしませんか。今晩はホテルなんか泊まらず、どこか田舎の探知されにくいところで車中泊でもしたほうが良かったかも知れないと今更のように思います。いえ、この街を選んだのは父からのアドバイスでもあり、作戦でもあって、一番勝率が高い賭けだろうと思ってはいるのですが。

ただ、一番勝率が高いからと言って、それが勝てる賭けなのかは、未だに不安です。

ん。私は顔を上げます。唸り声が止まりました。反射的に、リュックサックに手をかけます。

今度は明らかに、違う種類の鳴き声が聞こえます。

いわゆるこれは、遠吠え、でしょう。

オオオオオオオオー。

本来はかなり大きな音なのでしょう。音響遮蔽されているはずの隣の部屋からでもはっきり聞

こえます。警報サイレンのように徐々に高くなる遠吠え。これは、一度様子を見に行ったほうが良いのか……。

オオオオオオオオオオー。

遠吠えは続きます。これは何か起きているのかも知れない、と思い、頭の一部は警戒信号を発しているのに、身体に力を入れることが出来ません。その遠吠えは、神秘的で、不思議とずっと聞いていたくなるような……。

オオオオオオオオオオー。

しかし、その時、そこに別の音が交じるのを私は聞き取ります。バタン、バタン、と何かを叩く音。続けざまに、遠吠えは止まり、犬の吠え声のような、ワン、バウ、という声。

私は弾かれるように立ち上がり、部屋を出て、香織の部屋のドアを開け放ちました。

*

部屋の中はほとんど灰色の塊に、毛で覆われたその背中で埋まっていました。お、おっ
きい……。狼はこちらをチラリと見て目を見開きますが、同時に私も、その奥、ベッドの向こう側の窓を認めます。窓の外にいるのは、空中に浮遊する銀色のボディ。父に見せてもらった画像の通り。

実証実験中の妖異排除自動機械、『狩人』です。

「逃げますよ！」

叫んで香織の手を取ります。手？ 前足？ うまく取れないので肩の辺りにちょっと触って、部屋の外に走り出します。ガウッと狼が吠えた瞬間、窓が轟音を立てて砕け散り、すっと狩人が入ってきます。部屋のドアを閉めます。両面に札がはられているのでこれで多少時間稼ぎができるはずですが。私達は廊下を走り、非常階段を駆け下ります。私は一段飛ばしで。狼は踊り場から踊り場まで一足飛びに。どう考えても狼のほうが、脚が速いですね。これでは私が走っているのは効率が悪いですし、やはりプランAが妥当でしょう。

非常階段を地上まで降りて、道路に出た瞬間、上空からキンと金属音が追いかけてきて、狩人が外に出てきたことが知れます。

ガウウッー。

狼が、香織が大きく吠えます。後手に、いや、後ろ足に？ 私を押しやりながら、上空に浮いている狩人を睨みつけます。

「香織、戦っても勝ち目はないですから。逃げますよ」

グルルルルー。

「いえ、それは意味がありません。そもそもあれの狙いは香織なんですから、私が一緒にいよう
が逃げようが、どちらでも同じことですよ。それなら二人のほうが良いでしょう」

ガウッ、グルルルルー。

狼がこちらを向いて私を見ます。ぴんと立った耳の間の毛が、いつもの前髪の手前と同じように立っているのに気付いて私はちょっと笑ってしまいます。

「だから、あれは対怪異専用で作られてるんですから、香織が戦うのは全く意味がないんです。私に作戦がありますから一緒に逃げましょう」

本当は父がくれたアイデアですけどね。私のものだということにしておきましょう。

ガウウッー。

狼は首を振り、前足で地面を叩きます。

「聞き分けが悪いですね……」

やはり、この状態では香織はいつもの冷静さを失っているんでしょう。喧嘩したらまた嘔まれてしまうかも知れません。今は喧嘩している場合ではないのです。私はリュックサックから魔紐を取り出します。この紐は、猫の足音、女の髭、岩の根、熊の腱、魚の息、そして鳥の唾液から作られたのだそうです。狼を縛って遣うのに絶大な効果を発揮するのだとか。

「香織って、縛られるの、好きですよ？」

*

魔紐のリードを取り付けた狼に跨がり、夜の道路を疾走します。深夜だけあって車通りはありません。冷たい夜風が頬を叩きます。けれども跨った背中、灰色の硬くて分厚い毛に覆われて温かく、力強く躍動します。

ワオオオオオオオオオオー。

大きく香織が吠えて、跳躍します。跳び越えるは弘前公園追手門。櫓を軽々と飛び越えて、公園の敷地内に降り立ち、スピードを殺さぬままに駆け抜けます。着地の瞬間、しっかりと首元に掴まると、ほのかに香織のにおいがします。普通ならばこんなにうまく乗りこなすことは出来ないでしょう。魔紐のおかげで、私のバランス感覚は狼の身体にまで拡張され、一体化した身体のように動くことができます。駆け抜けると夜風が気持ちよく、私の気分は高揚します。

閉門後の弘前公園内は無事です。ここならば誰かに目撃されるリスクはない。多少派手に動いても問題ない。理想的なフィールドでしょう。

グルルルッー。

「真っ直ぐです。三の丸の広場まで行きます」

ガウッ、グルルー。

「あの狩人はおそらく単独ですが、まずは動きを見極めましょう。大丈夫、勝算はありますよ」

香織は魔紐のリードで私の思い通りに動きますが、意識が無くなったわけではありません。反抗は諦めてはいるものの、納得はしていないようです。しかし今は生き残るため、少し我慢してもらわねば。

公園内は木々が青々と茂り、そこかしこに花壇があって、春や秋のシーズンにはきっと綺麗なんでしょう。さっき調べた時も桜まつりの情報がたくさん出てきましたし。いつかシーズンの昼間に来たいものですね。私は背中の上で頑張ってバランスを取って、駈歩で進みます。四つ足の三拍子で、東北の冷たい風が心地よいです。

つと立ち止まり、振り返ります。四足で振り返るの、結構難儀なものですね。

ピクニックができそうな広場の向こう側、キンと微かな金属音を奏でながら、『狩人』が浮遊しています。

実証実験用妖異排除自動機械。昔は妖異の退治は、専ら人間の仕事だったようです。いわゆる陰陽師とか、神職や僧がその機能を成していた時代も長かったと言います。しかし、公安妖異局は時代の流れに合わせて、妖異の無害化をこの自動機械にやらせようとしている。それが父から聞いた説明でした。

稼働している型式は三つあるそうです。あそこにいるのはそのうちの一つ、耳と腕のあるタイプ。ちょうどコケシのような身体と頭に、ちゃんと三角の耳のような突起がついています。コケシでいうところの頭の部分の中央には、大型の赤く発光するセンサーがあり、それは大きな目玉のようで、鳥よけの案山子の意匠のようです。頭部から大きく垂れ下がる二本の腕のようなパーツが特徴で、三つの型式の中でも最も速度と近接攻撃力があるそうでした。

その目は私達を捉え。

瞬間、まるで反動というものを無視した動きで、強烈な加速度を効かせた狩人がこちらに轟と向かってきます。私は左手で魔紐を握り、香織の動きを抑えながら、リュックサックから取り出したるは呪的逃走三点セットの一、朽木細工の狐火の玉。天に投げれば茫と浮かび上がる橙赤色の狐火が、揺ら揺らと震えながらゆっくりと舞い落ちる様、そのまさに狐の嫁入りとでも言うべき光景に狩人は気を取られ、間隙をついて狼は一気に地面を蹴って中濠を越え、二の丸の方へ駆けます。背後を見やれば狩人は、幾重にも増える狐火を一つ一つ、腕を振り回して地面に叩きつけているところ。

「やはり基本は打撃ですか」

それは良いニュースでしょう。香織を撃ったような重火器タイプのほうが厄介です。飛び道具で狙われたらひとたまりもありません。

ガウッー。

見れば狩人が最後の燐火を叩き消すところです。すぐにこちらに向かってきます。

「南内門まで引きつけます」

私は魔紐を握り、狼と駆け出します。姿勢を低くして、香織の首筋に顎を乗せながら。

狩人の基本的な動作は、人間に対して現に危害を及ぼしている、あるいは差し迫って危害を及ぼすおそれのある妖異の排除、です。その判断は自律的に行われ、現地での危険度評価が優先されるそうです。ですから、手配されている香織の存在よりも、差し迫って公園内で火事に至るおそれのある狐火を見ると、その除去を優先してしまうわけです。

ガウッ、グルルーー。

「次はギリギリまで引きつけて、門の上に飛び上がってください」

キン、と別乾坤の音色を発しながら、狩人はこちらに接近してきます。その姿が大きく伸び上がり、ストップモーションのごとく急接近した狩人の腕が、いよいよ振り降ろされようというその瞬間、狼はしなやかな脚で跳び、一気に門の上に登り、大棟がギシリと撓んで受け止めて。狩人もその動きに追従し、地面を蹴ることもなく浮かび上がって殴りかかりますが、瞬間、その

動きは逸れ、私達はそのまま門の向こう側に降ります。着地の刹那に膝を丸めて、私と香織は地面を転がるように、間髪入れず叩き込まれる狩人の追撃を躲します。地面にえぐりこむように撃ち込まれた腕は、大地を爆縮させ、瓦解した地面に数メートルの虚。

これは当たれば即死。狼はもちろん、私だって真人間ではありませんから、命が危ないでしょう。けれど、見ましたか？ 狩人は、門を破壊するのを避けてました。ずいぶんとまあ、聞き分けが良い。

私はリュックサックから三点セットの二であるところの葛の葉を取り出し、空中に放ります。口の中で唱えます。恋しくば尋ね来て見よ。葛の葉はたちまち白狐に姿を変え、その細長い顔に炎を滾らせ、狩人に向かって駆けていきます。狩人はまた、この囿の対応を余儀なくされ、その間に私達は後退します。

「本丸に移動します」

ガウッー。

弘前城は日本七名城の一つと言われるそうです。元ネタは司馬遼太郎だそうですが、現在では専ら弘前城側がそう名乗っていて、他の六つの人たちは特にそういう主張はしてないのだとか。まあ、日本三大とか五大とか、そういうのって、だいたいそうかも知れませんね。

弘前藩津軽氏四万七千石に対し、司馬遼太郎は「三十万石以上の規模の城郭」などと書いているようで、それは盛り過ぎだろうという話ですが、確かにこの弘前公園は広大ですし、立派な城であることは間違いないでしょう。

現存十二天守の最北端。私達の移動ルートから大きく外れず、夜間に人払いがされ、広大なスペースがある史跡。理想的な条件を満たす場所はここであると、作戦会議で父は言いました。

満月に照らされた本丸跡からは、弘前の街と、遥かに岩木山の影が望めます。

しかし、主役であるはずの天守は不思議な状態です。周囲を足場に囲まれ、地面にはレールが組まれてゴテゴテとしています。

まるでこれから、天守が動くとも言うかのように。

そう、この天守はこれから動かされるのです。老朽化した石垣の修繕工事のため、この400トンの天守は、これから百年ぶりの曳家工事を行い、本丸の真ん中まで、70メートル移動します。これだけ巨大なものが、石垣から切り離されて移動されるだなんて大掛かりな話です。本丸の堀の水が抜かれているのも、工事の準備なのだとか。私としては、この環境条件を活かさない手はありません。

この天守を前に決着を付ける、それが私の作戦なのです。

さて、この作戦はうまく行くのでしょうか。うまく行かなければここで敗退、私はともかく香織がどうなってしまうかわかりません。狼部分が消されるだけなら良いですが、本人に危害が及ぶ可能性はもう否定できないと父は言いました。それは嫌です。そうはいかないのです。突然私は、心臓が早鐘のように打っていることに気づきます。はて、私はあまり緊張とかしないと、そう思っていたのですが。

「ちょっと我慢してくださいね」

そう言って、私は香織の背中の中を抜きました。

ヒーンー。

「悲しい声が出ましたね」

グルルルルルルルー。

「すみません、我慢してください。好きですよ、我慢」

私はその灰色の硬い毛を、三点セットの最後、木彫りの人形に差して、地面に転がします。たちまち人形は狼の姿に膨らんで、大きく伸びをします。同じものを二つ作って、狼が全部で三匹になります。

オオオオオオオオオー。

オオオオオオオオオー。

遠吠えが呼応し、高まっています。

オオオオオオオオオオオー。

オオオオオオオオオオオー。

どうしてでしょう、この声は不思議です。恐ろしいのに、聞き惚れてしまう。緊張しながら、恍惚を呼び起こす。

その声の向こうに、遥か彼方のジェットエンジンのような金属音を立てて、浮遊する狩人。狩人と狼たちが天守をバックに向かい合います。

キンと爆燃音を纏いながら。赤い目の狩人が両の腕の鉄槌で、狼を狙って振り下ろしたる夢の血の香に、三匹は吠えながら互いにコンビネーションを取り纏り、狩人との間合いを保ちながら回転し、交錯して見上げ果てた夜空には月明かりにかき消された何れかの星座があり、狼の星座は北狄の守りのこの城からは望めず、一匹の狼が追いつかれそうになると、別の一匹が背後から狩人に飛び掛かり、すると狩人はそちらに気を取られ、そのすきにもう一匹がまた背中に齧り付かん勢いで向かい、それを繰り返してダンスのように、回りながら、満月を廻して、銀箔を振りまいて、天守に駆け上がっては駆け下りて、狩人の裁きは空を切り、虚を殖やし、ついにその腕が狼の一匹を捉え、鷹作の狼は背中をくり抜かれて虚構に還り、霧散した影の中に落ちるは木偶の欠片で。その瞬間を捉えた狼が仇とばかり狩人を蹴倒し、水の抜かれた堀に転がって牙を突き立てるけれども、狩人の鎧鋼の身体に傷などはつかず、やがて向けられた拳にこちらも夢となり消え、その赤銅の目が、私を負う本物の狼を、神谷内香織が負う仮初の狼を捉えて、反動無く加速して。

もう後がありませんが、しかし、狼二匹が稼いでくれた時間で、私は最適なポイントを見極めました。私はリュックサックから扇子を取り出し、

「香織、私を降ろしたら、堀の下に飛び込んでください」

ガウッー。

肉薄する狩人の軌道を反転させ、私は地面に転がり、香織が水の抜かれた堀に飛び込むのを見ると、天守の表側に全力で走り込みます。これがうまくいかなければ。そのことを思い私は心臓

がギュッと冷たい手に握りつぶされたように感じます。そのときには香織は、木偶の狼たちのように虚となり空に消えてしまうのか、私はそれを考えないように、考えないように狙った位置について、手にした扇子をバチンと音を立てて開いて、口の中で真言を唱えます。父から教わった秘密兵器を構えます。そうして両手で捧げ持った扇子で、めいっばいの力を込めて天守を扇げば。

天守の周囲の足場が弾き飛ばされ。

曳家を控えて余計なものを取り払われた天守は、扇子の偉力に為す術もなく、羽毛のごとく軽々と浮かび上がり。

跳躍し、はるかに望む岩木山。

白漆喰と鉄扉がそれぞれに月光を反射して。

400トンの塊が飛んでいったその先、空中に浮かんでいる銀色のボディへと。

ギィイン、とおよそ天守閣からはしそうにない、してはならない音を立てて、重さを取り戻した天守が、狩人の上に覆いかぶさります。

*

狩人は公安妖異局の所属です。そしてこの天守は、文化庁の調査に基づき文化審議会が審議し、文部科学大臣が指定した国の重要文化財です。そもそもこの弘前城跡全体が、文部科学大臣が指定する史跡であって、文化庁の息のかかった領域なわけです。いわば狩人にとってはアウェイ。そこでさらに天守を破壊するなどということになれば、公安にとっては非常に面倒です。最悪の場合、狩人の運用を停止させられてしまうリスクがある。そんな事態は可能な限り避けるよう、狩人はプログラムされている。

だから、狩人とやり合うなら国宝や重文や史跡を活用しなさい。城址とか、寺社とか、燈花が通っている大学とかも、フィールドとしては良いだろうね。そう父は言いました。

父からこのアドバイスを聞いたときは、なんて面倒な、くだらない大人の事情なんだろうと思いましたが、ここまで観面に効果があるのを見てしまうと、驚き呆れる思いです。

狩人は天守の下でもがいています。

落としてはならない大切なものを、必死に支えるように。

それはそうです。なんて言っただって、重要文化財です。天守ですよ？ これがただの鉄塊であったなら、この狩人は片手でそれを、虚に帰することが出来たでしょう。それは何の抵抗にもなりません。けれどこれは天守です。大切に扱ってもらいませんと。

異形の怪力を誇る狩人ですが、さすがに400トンを支えるのはギリギリと言った様子で、二本の腕はカクつき、ブレてうまく結像できず、息も絶え絶えと言った風情。せいぜい頑張っただけに戻してくださいな。

その朦朧とする狩人の下に見えるは、間一髪で無傷の。

あれ、私、またやらかしました？

五時台の津軽海峡フェリーにちょうど間に合い、車を入れて2等船室、というかただの大部屋に転がりましたが、すぐに香織は外を見てくると言ってどこかに行ってしまいました。

香織はいつにもまして言葉少なで。表情は険しくて。

やはり、やらかしたらしいのです。

そうですね。いきなり縛って自由を奪ったのは悪かったのでしょうかね……。いえ、自由を奪うのが目的ではなく、二人一組で機動的に動き回るためにその方が良かったということですが……。言い訳にもなりません。私、その言い訳を、ちゃんと説明してすらいないのですから。香織の言うことを聞かなかったというのも、ゆっくり話し合う時間がなかったですし、まずは狩人からどう逃げるかが重要だと思ったからというのと、狼の状態の香織を説得するのは難しいだろうと勝手に判断したからですが、そうはいつでも確かに、香織からすればずいぶん酷い扱いを受けたという感覚でしょう。

うん……。そうですね……。

まずい……。

携帯電話が震えました。見れば、『みとはち』と表示されています。

「もしもし」

「やあ、燈花ちゃん、いま話せるかな」

「いま自己嫌悪で忙しいです」

「ありがとう、話せるんだね」

「はい」

珍しい人から電話があるものです。みとはちさんとはそれなりに連絡を取っているのですが、いつもテキストだけですから。

「どう、香織っちとは仲直り出来た？」

「……はい。一応」

相変わらずいきなりすごいところに球を投げ込んできますね、この人。

「一応？」

「あのあと仲直りは出来たのですが、さっきまたやらかしました」

「やらかしたって」

「香織の気持ちを無視して暴走しました」

「駄目じゃん」

「駄目です。呪殺してもらって良いですか？」

「呪殺は良くない」

銃殺も良くない。

「でも一度は仲直りできたんだ？」

「はい。相思相愛です」

「自信ありすぎるだろう」

「みとはちさんに言われたとおり、全部お話ししました。わかったんです。私たちは互いを知悉できない、だからお話ししなければならないと。わかったはずなのですが」

また繰り返してしまって。

「でもさあ」

楽しそうな声でみとはちさんは言いました。

「また、話せばいいじゃない」

「え」

「相思相愛なんでしょう？ 何があったのか知らないけどさ、燈花ちゃんに悪気がないのなら、説明して謝ればいいんじゃない。二人はもう、お話できるんだから」

みとはちさんの言うことはどこまでも当たり前で、言い方と言う人さえ違えば、私は勝手なことを言うなと反発したかも知れないくらいですが、けれども私は不思議と、それを素直に聞くことが出来ます。

「……はい、そうですね」

「実はさあ、燈花ちゃんにお礼が言いたくって電話したんだ」

「はい？」

「香織っちにちゃんと話してくれて、ありがとうって」

「どうしてそれでみとはちさんがお礼を言うのですか」

「すごく勝手な話だけれどさ、それで二人が仲直りできることに、勇気づけられた、っていうか」

「はあ」

「私は占い師だから、ときどき未来が見えるんだけれど」

突然の方向転換。

「前に大学の蛇塚の話と、そこに出る幽霊の話をしたでしょう。その幽霊に、祟り蛇に、襲われて打ちのめされて、死にかけて家に帰ったら、はるかがいなくなっている、そんな未来が見えたんだ」

はあ。そう私が相槌を打つ間もなく、みとはちさんは続けます。熱に浮かされたような口調で。

「そうして一人になった私は、はるかに手紙を書くんだ。怖くて言えなかった、秘密を伝える手紙」

私は何と返事をすれば良いのか、わからなくなります。

「私が見える未来は、未来の私が過去の私に教えても構わないと思った情報だけなんだ。だからこれが見えたということは、未来の私は相当の覚悟だと思う。燈花ちゃんに偉そうにあんなことを言ったけれど、本当は私も同じで、はるかに言うべきことを、言わずに後回しにし続けてきた。秘密を秘密にし続けてきた。けれどそれでは、大きなツケを払うことになるって、そういうことなんだと思う」

みとはちはさんとはだんだん早口になり、息をつく間もありません。

「だから私も、はるかに本当のことを話そうと思って。それで結果がどうなるにせよ、先に燈花ちゃんにはお礼を言っておきたかったんだよね」

「あの、みとはちはさん、大丈夫ですか？」

「え？」

「なんだかつらそうですが」

電話の向こうで、咳き込む音。

「ああ、ごめん。まだ喉の奥が痛くって」

「風邪ですか？」

「いや、だから蛇が……」

「蛇？」

「ああ、こっちの話で」

「みとはちはさん、なんだか私、心配です」

急にお礼を言われて、よくわからないけれど何か重大な行動をしようとしていることを語られる、というのは、普通に考えれば少し、怖くすらあります。

「ありがとう、でも大丈夫」

「大丈夫なら良いですが……」

「シャワーも浴びたし、怪我の手当もしたし、勝負下着だから」

「黒ですか」

「いや、透明で黒のドットが入ってともすればタピオカみたいな模様」

「それは大勝負ですね……」

「一世一代、乾坤一擲の大勝負なんだ。ほんとに」

みとはちはさんが眼鏡を上げるのが見えるような気がしました。

「……みとはちはさん。私たち、似ているのかもしれないね」

「なにそれ、愛の告白？」

「はい、急にみとはちはさんが愛おしくなりました」

「お前は何を言っているんな」

「な」

「ああ、ごめん。まだ喉の奥が痛くって」

「噛みました？」

「いやあ、喉の奥まで入られると、噛むこともできなくって」

「特殊なプレイは程々にしたほうが良いですよ」

「特殊なプレイではない」

「いえ、なんというか、そうやって勝手にいろいろ考えて、勝手に盛り上がって、勝手に決めてしまうの、それで勝負をかけてしまうの、みとはちはさんと私は似てるんじゃないかなと思って」

電話の向こうで、みとはちはさんが笑い出しました。私もつられて微笑んでしまいます。

「はは、そう言われちゃうと言いつ返しえないな」

「でも大丈夫ですよ。私と違って、みとはちさんの勝負の内容は、草苺さんと話すことなんですよ。だったら大丈夫です」

「そうだといいなあ」

「二人はDまで行ってるんですから」

「Dって何」

「ドッペルゲンガー百合」

「洒落にならないからやめろ」

「大丈夫、のDです」

「大失敗にならないように頑張るよ」

そう言う頃には、みとはちさんの声から暗く切羽詰まった熱病の響きは消えて、いつもの堂々とした落ち着きを取り戻されているように思えました。

「ああ、あと、燈花ちゃんに謝らないといけないこともあるんだ」

「なんですか？」

「これからはるかのお見舞いに行くから。全速力で行くから。だからね、今日は代返、出来ないんだ。それを言おうと思って」

「え」

「香織っちにも謝っておいてくれるかにゃ」

「にゃ？」

草苳はるかは何も知らない。

部屋をそのままにして出てきてしまって、今頃部屋の主である三ト八恵が慌てふためいていることも知らずに、ふらふらと歩いていく。まるで幽霊の後を追うように。離れてしまった魂を追うように。

彼女が追いかける幽霊。

消えたはずの少女。

忘れられた少女。

人間は倒れながら歩いているという話を思い出す。片脚を前に出して、重心を倒しながら身体を運んでいく連続運動は、バランスが崩れているという点では倒れていることに他ならず、それでいて地面に衝突しないのは、倒れきる前に軸足を変えているからというだけの理由なのだ。前を歩く彼女、深水瑞希の足取りは、本当に倒れ続けているような、それでいて決定的な転倒を踊りながら回避しているような、実体のない幽霊に見える。

だけどそれが幽霊ではない証拠に、彼女は草苳はるかと同じだけ歳をとって、背も伸びて、肩にかけたカメラも昔ほどは大きくない。消えたはずの少女は消えておらず、忘れられた少女はもう少女ではない。

「どこへ行くの……」

はるかへの呼びかけにも彼女は曖昧な音でしか答えず、歩みを止めない。突然戸口に現れて「散歩をしよう」と言う彼女についてきてしまったことを、しかしはるかは後悔していない。その余裕もなく、混乱している。本当ならそれなりの広さがあるはずの部屋の片隅のほんの一部しか使えないみたいに、水面から口を出して水槽の隅に僅かに溜まった空気で呼吸するみたいに、混乱したはるかは考えを巡らせることが出来ない。清々しい朝に、本来なら通勤通学の人や車が溢れるはずが、なぜだか通りはしんと静かで、東京ではありえない霧が立ち込めている。世界には今、この二人だけしか存在していない。深水瑞希の足取りの先に目的地は無く、時折そのカメラで写真を取りながら、ただひたすらにこの街の霧を晴らしていくように、回転しながら進んでいく。はるかは突然、自分が部屋着のまま出てきた事に気づいたけれど、幸い靴はスニーカーで、これなら歩くのに支障はないと思う。

「久しぶりだね、はるか」

パシャリと写真を撮って、瑞希が言った。

「久しぶり、だね……」

はるかは夢遊病のように、ふらつきながら答えた。

「まず最初に。すごく今更なんだけれど。中学のときは、ちゃんと挨拶もできずになくなって、ごめんね。あのときの私は、学校の友達の事まで考えている余裕がなくて」

瑞希の左右非対称に切り揃えた髪を見て、はるかは未だに、これが現実なのかつかめずにいた。

「いろいろ大変なことはあったけれど、おかげさまでなんとか生きてるよ」

はるかには集中して考えることが出来ない。そんなことは珍しい。いや、それとも最近ではよくあることだろうか。

「仕事を、いや、どちらもバイトみたいなものだけど、二つ掛け持ちして、なんとか生活できてる。しかも片方は趣味でもある。これね」

そう言って瑞希はカメラを持ち上げた。

「もう片方はまあ、特殊な仕事だけど、実入りは悪くない。それで今日は来たんだけどね。相手のはるかだって知って、ちょっとびっくりしたけれど」

無量さんは仕事の振りが急なんだよな、と瑞希は一人つぶやいた。

「仕事……？」

突然私に会いに来たことが、仕事だというのだろうか、せっかくの再会なのに、とはるかはぼんやり考える。

「物語り」

瑞希が微笑んで言う。

「お話を聞かせてあげるっていう、仕事なんだ」

*

瑞希は語る。

これは昔の中国のお話。

衡州で役人をしていた張鎰(ちょういつ)という男に、娘がいた。もともと二人娘がいたが、姉の方は幼いうちに亡くなり、倩娘(せんじょう)と名付けられた美しい妹が残った。張鎰には王宙という甥がいた。王宙は幼い頃より聡明で、張鎰は彼を高く評価していた。事あるごとに、倩娘を王宙の妻にさせよう、と張鎰は言っていた。

さて、時は流れ、王宙も倩娘も大きく成長し、二人は密かに想いあっていた。だが、張鎰はそれに気付いておらず、二人を結婚させようなどという話もいつしか忘れてしまっていた。あるとき、倩娘に縁談が持ち上がり、張鎰はこれを承諾してしまう。王宙は深く悲しみ、密かに張鎰を憎んだが、どうにもしようがない。家族の反対を押し切り、官吏になる試験を受けるという口実で、家を出て都へ向かうことにした。王宙が故郷を出立した最初の晩、しかし何者かが、闇夜の中を驚くべき速さで追ってくる。人影に誰何すれば、何とそれは倩娘であった。王宙は驚きながらも喜び、その手を取って事情を聞けば、倩娘も涙ぐんで言った。

「夢の中でもずっと、貴方の愛を知っておりました。いま、父は私の気持ちを奪ってしまおうとしますが、貴方の愛情の深いことの変わらなさを思って、その気持ちに応えようと、家族を棄てて身を捨てて、こうして参ったのです」

王宙は思わぬことに有頂天になって喜び、そのまま倩娘を伴い、都へと逃げた。

さて、それから五年の月日が流れた。二人の間には息子も生まれ、幸せな日々を送っていた。

しかし、故郷の張鎰とは音信不通のままであった。倩娘はいつも両親を想っていたが、あると

き夫に嘆いて言った。

「かつて私は、両親を裏切って貴方のもとに参りました。もう五年も経つというのに、父母との往来は絶えたまま。どのような顔をしてただ生きていけば良いのでしょうか」

王宙はこれを可哀想に思って、二人で故郷に帰ることにした。

故郷につくと、まず王宙が一人で張鎰の元へ行き、駆け落ちしたことを率直に詫びた。しかし、張鎰は驚いて言う。

「倩娘は病に倒れ、床に伏すこと数年になる。どうしてそのようなでたらめを言うのか」

「いえ、倩娘は私と共に連れてきております。実際に今、船の中におります」

張鎰は訝しんで、使いの者を走らせて確かめさせる。使いの者が船の中を覗けば、果たしてそこにいるのは倩娘である。倩娘は微笑んで、お父様はお元気ですか、などと尋ねる。使いは大いに混乱し、慌てて張鎰のもとへ戻ってこれを報告した。

さて、それを漏れ聞いた病床の倩娘は喜んで起き上がり、身支度を始めた。こちらもにこにこ微笑むばかりで何も言わない。やがて彼女が部屋から出ていくと、帰ってきたもう一人の倩娘と向かい合い、周囲の人が驚き呆然とする中、ぴったりと合わさって一体となり、その服だけが二重に重なっていたという。

「……不思議なお話ね」

草苺はるかはその言った。草苺はるかは何も知らない。

物語を終えた瑞希は、絶品チーズバーガーを頬張って言った。

「絶品ね、これ。ハンバーガーって初めて食べたわ」

「お嬢様か」

家を出て適当に歩いたは良いが、休憩が必要だと言うので適当に入った店がロッセリアだった。けれどもここは、草苺はるかの知っているロッセリアとは違って、店員には顔がないし、他の客たちも霞のようだ。不思議な鈴の音のようなBGMが流れている。草苺はるかは何も知らない。

「ねえ、聞いてもいい？」

「どうぞ」

瑞希は絶品Wチーズバーガーを頬張りながら答えた。食べるのが速い。

「患っていた方の倩娘は、何が嬉しかったのかしら」

五年ぶりに故郷に戻ったもう一人の自分。おそらくは、自分から抜け出していった靈魂。その帰還を知った彼女は、喜んで起き上がり、いそいそと身支度をする。彼女はどんな思いで自分自身を迎え入れたのだろう。

瑞希は絶品ベーコンチーズバーガーを頬張りながら答えた。

「そもそも彼女が患っていた病って、魂が肉体から離れてしまったから、バランスが崩れた、そういう状態だよ。もう一人の自分が帰ってきたなら、単純にそれが解決する。病気が治ることだよ。さらには想い人であった王宙が夫なんだ。喜んで不自然じゃないでしょう？」

「そうかも知れないけれど……」

草苺はるかは腑に落ちない。草苺はるかは何も知らない。

瑞希は絶妙バーガーを頬張りながら言った。

「それが気になる？」

「私はさっきから貴方がいくつバーガーを食べているのかも気になるわ」

瑞希は濃厚6種チーズの絶品チーズバーガーを頬張りながら言った。

「語るのにはエネルギーが必要だからね。補給しなきゃ」

「よくそんなに食べられるわね」

「形而上のバーガーは胃もたれしないんだ」

草苺はるかは理解できない。

「経費で落ちるしね」

瑞希は絶妙BLTバーガーを頬張りながら言った。

朝だと言うのに月の光が降り注ぐ。銀白色の粒子を浴びて、翅の生えた瑞希の身体はいよいよ軽そうだ。さっきあれだけ食べたとは思えない。そういえばはるかは、何も食べなかった。部屋に残してきたトーストのことが一瞬思われ、けれどすぐに瑞希の姿を目で追うのに夢中になって、トーストのことは忘れてしまう。瑞希の肌の奥の血管が輝き、右側だけ伸ばした髪は、水を吸って揺らめいている。喪われたかと思ったものが現出した驚きと喜びと、もう取り返しのつかない疎外の悲しみに覆われて、はるかは夢中でシャッターを切る。新雪を踏みしめながら、いつの間にか手にしたカメラは、ファインダーを幾重覗いても宇宙の果てに届かない。草苺はるかは何も知らない。世界と瑞希の霧を晴らすように、はるかは夢中でシャッターを切る。

「一緒に写真を撮りに行こうって、言ってたね」

瑞希が言う。反転する。瑞希のファインダーの中に収められたはるかは、ぼんやりと考えている。

「ずいぶん遅くなっちゃったけど、今日は会えてよかった」

「うん……」

はるかは頷いて、そう言うのがやっとだった。

「でも中学生の頃より、今のほうが私は写真が好き」

「どうして……？」

「あのとき、周りの友達は何もお互いを騙してるみたいなことを、私言ったでしょう？」

露出を上げてみる。

「どうしてだろう、もうそういうの、つらくなくなっちゃった」

もう少し絞ってみる。

「だからね、誰かのシャッターチャンスを狙う、っていうことが、つらくなくなったの」

しゃがんでみたりして、角度を探す。

「別に、何かきっかけがあったわけじゃなくて……きっかけになりそうなイベントなんて、山ほどあったのに、そのどれもがピンとは来なくて。だけど」

どうしてだろう、その一瞬が、捉えられない。

「隙を狙ってるなんて、思わなくていいんだって」

草苺はるかには夢中でシャッターを切る。けれど写真は一枚も撮れていない。

「さっきのお話。離魂記、っていうんだけど」

二人はいつの間にか、たどり着くべき場所にたどり着いている。顔のない人々が動き回る。草苺はるかは何も知らない。この病院に、自分が入院していることも気付いていない。

「私はあのお話は、患っていた方の倩娘が再開を健気に喜んでいたことに救いがあると思うんだ」

深水瑞希は言った。

「患っていた方の倩娘は、抜け出した靈魂に置いていかれて病に倒れて、ずっと臥せるばかりだった。五年間、駆け落ちした方の倩娘が王宙と幸せに暮らして、子供まで作っていたのに、自分はずっと閨(ねや)のなか。はるか、君はこう思ったんだよね。患っていた方の倩娘は、駆け落ちした方の倩娘を妬みはしないのか」

深水瑞希は歩き始める。草苺はるかはそれを追う。ふらふらと、ゆらゆらと。夢遊病のように。離魂病のように。草苺はるかは何も知らない。

「患っていた方の倩娘は、抜け出した倩娘のことを妬んではないし、その帰りを幸せに受け入れたんだよ」

だからきっと君も、大丈夫。

「またそのうち、元気になったらご飯でも行こうよ」

瑞希はそう言って手を振った。

「だって私達、大人になったもの」

目を覚ました草苺はるかには微笑んで身支度を始める。すっかり筋肉が落ちてしまい、身体は言うことを聞かない。それでも身の回りを整える。穢れを覆い隠す消毒液のにおいの向こうに、はるかは太陽のにおいを嗅ぎ分ける。そうだ、これはいつか、あの坂道を登ったときのにおい。

草苺はるかは何も知らない。けれど、この後この病室に、大切な人がやってくるであろうことを、なぜだか知っている。

どうしてその人が、大切な人になったのだろう。考えてみれば不思議なものだ。これまで沢山のひとと知り合ったはずだけれど、その人だけが特別だった。始めは、変な人だと思っていた。私とは違う、他の人とも違う、不思議な人。気になって、心配で、色々と関わり合ううちに、気付いたら特別になっていた人。だから、どっちが先だったのか、分からない。草苺はるかは何も知らない。

そうしてその人が、病室の入り口に現れた。けたたましい音を立てて。

「はるか……！」

三ト八恵は、全力疾走の後で肩で息をし、汗で張り付いた前髪を払いながら、目を見開いていた。

その姿を見て、草苺はるかは肩を震わせる。

「ぷ……くく……」

でもすぐに耐えきれなくなって、声を上げて笑い始める。ずっと眠っていた肺に活を入れるみたいに、元気よく、底なしに笑う。何が起きたのかわからず、八恵は呆けたように突っ立っている。その顔を見て、はるかの笑いはまた止まらない。

「どしたの、はるか……」

「あはははは、だって、だって、おかしくて」

「なにが」

「……八恵も、走るなんてことがあるんだね！」

くくっ、とまだはるかは笑いを抑えきれない。

草苺はるかは嬉しかった。親友が、そこまで自分のことを心配してくれることが。そこまで必死になってくれることが。私はどこへもいくつもりなんてないのに、全速力でここに来てくれることが。

三ト八恵は引きつりながら愛想笑いを浮かべ、こわごわと言う。

「はるか。あの……」

「なに？」

「卵ハムチーズホットサンドって、食べたこと、ある？」

三ト八恵にいつものような余裕はない。答えを待つ手に自然に力が入り、全身がこわばっている。草苺はるかの肩が震える。

「く……くく……あははは」

また笑いだしたはるかにつられて、八恵も笑ってしまう。

「お嬢様だから、食べたことないかも！」

はるかがそう言って、吹っ切れたように二人で大笑いする。消えてないんだ。嘘じゃないんだ。無くなっていないんだ。二人は咳き込むまで笑う。親友の無事を確認して、安堵する。世界を祝福しながら、笑い続ける。

「ごめん」

笑い疲れた後で、八恵が言う。

「知っているのに、知ってしまったのに、言えなかった。はるかが消えてしまうんじゃないかって、不安だった。私家で過ごした時間が、なかったことになってしまうんじゃないかって、怖くて。今更言い出せなくなって」

病室の窓から、梅雨入り前の最後の晴れ間が、遠く遠くに見えた。

「それなら私も同じ。八恵が消えてしまうんじゃないかって思って、ずっと怖かった。ずっと。けど、八恵もそう思っていてくれたなら、それだけで嬉しい」

三ト八恵は知りたくなかった。この安堵を、この幸福を、ズルをして予め知っているようなことがなくて、本当に良かったと思った。だからこの結末を、この気持ちを、日記には絶対に書かないでおこうと思う。

草薙はるかは何も知らない。けれどここに、大切な人がいることを、それだけ、なぜだか知っている。

■我が国におけるオオカミの復活

江戸時代後期における狂犬病の猛威と、明治期における開化政策により、我が国における狼の神格は地に堕ちた。時を前後して、鹿を始めとする野生動物の乱獲により、ニホンオオカミたちが糧を失い、やむなく家畜を襲うようになったことで、オオカミは憎むべき敵となっていった。日本人は狼に対する畏敬、畏怖、信仰を忘れ、害獣として迫害することとなり、ついに彼らは、オオカミを絶滅へと追いやった。

現代において、シカやイノシシによる獣害は著しく、日本全国において大きな問題となっている。これはオオカミが日本から失われ、食物連鎖の頂点が空位になったことで、生態系のバランスが崩壊していることの証左である。農耕民族である日本人が、作物の守り手であった大口真神を失い、自然への畏怖を失ってしまったことの痛烈なる証である。

この事態に至ってもなお、日本人の多くは狼を卑劣な害獣としてしか捉えていない。「赤ずきんちゃん」を始めとする西洋童話世界に現れる、ずる賢い悪役としての狼像に囚われているのである。

我々日本人は、狼への畏怖の心を取り戻さなくてはならない。生態系の頂点たるオオカミの復活と、山の動物神の頂点たる狼の復活が、今こそ求められている。

『日本人とオオカミ』（日本にオオカミを取り戻す会・編）より

拗ねるのもあんまり大人げないと思ったので、燈花から謝られたときは嬉しかった。気まずいままこの旅を続けるのは嫌だったし。それに、こちらこそごめん、と言った瞬間の、つまりは僕から許された瞬間の燈花の顔を見たら、許してあげるのって悪くないな、と思えたりした。

燈花に背中に跨がられるのは、決して嫌な気分ではなかった。ただ、身体が自由が効かなくなって、ろくに説明もされずに狩人と戦うことになったのが、どうしようもなく怖かったのだ。けれど、燈花はもうあんなことはしないと約束してくれたし、実際、この道中で最も危険な夜を首尾よく乗り切ったことは喜ぶべきことだから、もうこれ以上うだうだ言うのはやめることにする。

というか、狼の状態があんなに動けるものだとは、僕は知らなかった。藤木先生からは狼になるときは外に出るなど言われていたし、僕自身、自分が制御できなくなることが怖くて、いつも自分を拘束していたからだ。

*

「毎月一度、満月の夜だけは、君は狼にならないといけない」

藤木はそう言った。

「狼になった君の姿を他人が見たら、当然驚く。それに、君の意識は無くならないけれど、体調が悪いときと一緒に、多少感情が乱れたりする。だから絶対に、狼になっている間は外に出てはいけない。自分一人の部屋で、安全を確保すること。君自身の安全でもあるし、周りの人間の安全でもある」

それは何度も繰り返された忠告だった。

「そのかわり、狼は君を守ってくれる。誰よりも強く守ってくれる。狼が付いている限り、それが憑いている限り、火鼠は鳴くことだって出来やしない。それが山の神の頂点、王者たる狼の力だからだ」

「これからずっと、狼をつけたままにするんですか」

僕は尋ねた。

「おおよそ二十歳までに火鼠が離れていくから、それくらいまでは必要だね」

狼の秘密を抱えて、安全に夜を過ごすには、狭い実家は不向きだった。何度となく母に目撃されそうになり肝を冷やした僕は、早く実家を出たいと思ったけれど、家の経済状況を考えたらそれは難しいはずだった。

「神谷内くん、東京に来ないか」

けれど藤木先生はこともなげに言った。

「君、成績は悪くないんだろう？ 奨学生で寮に入れば、お金のことは心配しなくて良い」

いつの間にか彼がその高校の教師をしているという事実は、入学式の日まで僕には知らされなかった。

*

「まずは合格おめでとう、神谷内くん」

大学合格祝いだと言って、寿司に連れてこられた。ちょっと高そうだ。

「良いんですか先生、教え子の女子高生と二人でこんな所」

「退職金をもらう予定はないから大丈夫だよ」

藤木は先生ヘラヘラと笑った。

「え、辞めるんですか」

「うん、大学に仕事が見つかってね」

「……………」

僕は先生をじっと見た。最初に河川敷で会ったときと変わらないくたびれた顔。

「先生、僕のストーカーか何かですか？」

僕のこと好きなんですか、と言いかけて、言葉を変えた。いよいよ事案になってしまいかねない。

「いやいやあ、教育者としての務めだよ」

先生は照れながら頭をかいた。

「褒めてない」

高い寿司は美味しかったけれど、やっぱり僕は先生と二人だと落ち着かなかった。最初に河川敷で会ったときからずっと、この人には覗き込まれているような気がするのだ。自分の中身を見られる感覚。自分の中身を知られる感覚。

「神谷内くん、四月からはどこに住むか、もう決めた？」

高校を出たら、もちろん今の寮は引き払うことになる。

「まだ決めていないですけど、一人暮らしですかね」

当然そのつもりだった。自分を監視するには、自分と向き合うには、一人が一番だ。

「そしたら必要なことがあったら何でも言ってね。物件探し手伝うし、必要なら保証人とかなるし。引っ越しも手伝うし。何ならうちに一緒に住んでも良いよ」

「事案だぞ」

こうして親しげに言葉を交わしていて、この人が僕に対して本当に親切で、悪意なく援助をしてくれていると感じる。けれど同時に僕は、僕を知るのは僕だけで良いと思っている。だからそこに、断絶がある。だから僕は、最後の最後で遠ざけてしまう。

「君がこうして立派になって、お母さんも喜んでるでしょう」

「そうですね」

母は喜んでくれている。地元に残して東京に出てきてしまっている僕を、それでも応援してくれている。

「お父さんも喜んでるよ」

「……はい」

先生は父と、学生時代に先輩後輩の関係だったと聞いている。けれどそれ以上を語ってはくれたことはなかった。いつも密かに、何か話してくれないだろうかと思っているのだけれど。

「大学ではきっと、たくさん勉強できるよ。たくさん知り合いも出来るだろうし、中には一生の友達も出来る」

先生は、急に先生みたいなことを言う。

「神谷内くん、友達なんていないみたいな顔してるけどさ」

「失礼な」

「じゃあ友達欲しい？」

「まあ……」

「ほら」

「失礼な」

「けれどそういうのって、望むと望まざるとに関わらず、人生には突然現れるんだよ。この人は自分の理解者だ、っていうような人」

「はあ」

「君のお父さんもそういう人だった」

僕は顔を上げて続く言葉を待ったけれど、それきり何も続かなかった。

「このお寿司、美味しい？」

「東京にしては、まあまあですね」

僕は精一杯、そう言った。

札幌でのホテルは、エレベーターに女社長の顔が貼ってあるタイプの例のホテルチェーンでした。毎回チェックインする度に会員カードがもらえるのですが、毎回なくすので今回の旅でもう三枚目くらいな気がします。

けれど今日が最終夜です。

少なくとも往路は。

目的地、六峰神社は、札幌から二時間ほどでつくそうですから、明日の朝の移動でゴールとなります。明日の昼までにはこの小旅行は、いや、もう大旅行といっても良いかも知れませんが、この旅は完結しているのでしょうか。そう思うと感慨深いものがあります。

例によって例のごとく、ベッドで埋められた代わり映えしない部屋です。この生活にも大分慣れてしまいました。

「ちょっとコンビニに行ってきます。買うものありますか」

「んー」

本を読んでいた香織が顔を上げて言いました。

「大丈夫」

文庫本は指輪物語の旅の仲間の下1でした。まず旅の仲間って第一部みたいな感じだったと思いますが、それが上下巻で更に数字で分かれているって長すぎでしょう。よくそんな物を読みますね。仙台で書店に寄った時、香織は「この旅って指輪物語っぽいよね」と言いながらそれを買っていました。それだとラストシーンの一歩手前で、ポジション的に私が狼になってしまいますよ。映画しか見てないので詳しい話知りませんが。

女社長とにらめっこしながらエレベーターで一階に降り、ホテルを出てすぐ目の前のファミマへ向かいます。スマホが震えるので見れば、みとはちさんからメッセージが届いていました。

いつも頼ってばかりのような気がしますが、みとはちさんには調査をお願いしていたのです。「思ったより時間がかかってごめんねえ。でもビンゴだよ。無量蓮美も同じ会のメンバーだった」

「ありがとうございます。繋がりますね」

「言ったとおり、私はこの無量というやつに先日会っているよ。ひどい目にあわされた。そのときにも藤木センセーに昔世話になったんだとか、釈放の手助けをするんだとか言っていたから、間違いないだろうね。さてセンセーが無事釈放されたのかは知らんけどさ」

みとはちさんにもう一度お礼を送って、私は天を見上げます。曇天の闇夜はやけに明るく。概ね、私の仮説は完成したと言って良いでしょう。私はファミマでドーナツとカフェラテを購入します。

ホテルに戻り、ちょうど一階に止まっていたエレベーターに乗り込むと、女社長の他にもうひとり、乗り合わせた先客がいました。小学校中学年くらいの少年。いかにも育ちの良さそうなシ

シャツを着て、しかし一瞬だけこちらを見た眼光は鋭く、私はエレベーターに乗り込み彼とすれ違う瞬間に、その子の目が紫色に光るのが見えたような気がしました。

私は自分の階のボタンを押そうと少年の後ろから手を伸ばし、しかし、その手が空中で止まります。

私より先に乗っていたはずの少年は、階数のボタンのすぐ横に立っているにもかかわらず、そのボタンはどこも光っていません。なぜでしょう。普通は乗ったらボタンを押すでしょうし、私が乗ってくるのを待ったとしても、私が乗っている間に、あるいは乗り終わったの確認してから、押すでしょう。少年はそんな素振りも見せず、ただ突っ立っているだけです。あるいは少年は上の階から降りてきて、いまこの一階に到着したところに、私が乗り込んでしまったのかとも思いましたが、少年は降りる素振りも見せません。

「……どこも押していないのですか？」

私がそう尋ねると、背の低い少年はぐるりと上を向くように振り返り、こちらを睨みます。

「異世界に行くのに失敗した」

「……はい？」

少年は舌打ちして顔をしかめました。

「エレベーターで異世界に行く方法があるんだ。それを試してたんだけど、途中でお前が乗ってきたから失敗だ」

エレベーターで異世界に行く方法。知っています。

一人でエレベーターに乗って、一定の順序で階を移動します。次々と移動して行って、その間に誰も乗って来なければ成功し、ある階で謎の女が乗ってくる。それには絶対に話しかけてはいけません。そのまま一階のボタンを押すと、エレベーターが何故か上っていき、そのまま異世界に行ってしまう。そういう都市伝説です。試したことはありませんが……。

「はあ、それはすみません」

少年は小奇麗な身なりで賢そうな顔をしています。都市伝説の实地検証とは将来有望ですね。私は少年を眺めます。その外見と中身を眺めます。態度が悪いながら、私に対して興味を持っている。この人はどれくらい話についてきてくれるだろうかと、私を観察している。

「で、お姉さん何階？」

少年は横柄に言います。

私は持っていたカードキーをひらひらさせました。少年はそれを読んで、七階のボタンを押します。

エレベーターがガクン、と揺れ、私たちは上に向かって運ばれ始めます。

「ん、そういう君は何階ですか」

少年は目をゆらゆらさせます。

「俺は別に、泊まってないから」

「……君、都市伝説を試すために勝手に入ったのですか」

「十階以上あるエレベーターじゃないと駄目だから」

勝手に入る方が駄目でしょう。他に適当なビルはなかったんでしょうか？ まあ、十階あるエ

レベーターで、かつ人が少なめという、それほど選択肢はないのかも知れませんが。

「異世界に興味があるのですか？」

少年は舌打ちして顔をしかめた。どうやらそれが彼の癖です。

「本当にそういうのがあるかどうか確かめたかっただけだ」

そうですか。でも嘘をついている感じはしません。本当にどちらかと言うと、そういう探究心なんでしょう。

「異世界に行くっていうのが、本当はどういう状態を指しているのか、分からない。だから、これは試しがいがある」

少年はそう言いました。聞いても頭の中でちょっと像を結ばない、どういう意味なのかわかりにくい言葉です。

「つまり、謎があるような都市伝説が好きなんですね」

そう言って微笑みかけると、少年は舌打ちして顔をしかめました。シャイなのですね。

「謎がない都市伝説はつまらない」

「謎がない都市伝説……でもそう言われると、逆に思いつかないですね……」

都市伝説というのは都市伝説ですから、大抵は多少の謎があるように思います。

「たとえば、イクスさまっていうつまらない話がある」

つまらないと言いながら、彼はその話をしたように、こちらの反応をうかがっています。

だから私は聞いてあげます。

「どんな話ですか？」

少年は微妙に間をとって、まるで言い淀むみたい、別に話したいわけじゃないんだけどと言うような間をとって、語り始めます。

「あるところに、走るのが大好きな元気な女の子がいた。ある冬のすごく寒い日に、この女の子は締めかけた踏切を無理やり渡ろうとして、列車に轢かれてしまう。両足を根本からぱっさりと切断され、普通ならば即死。だけれど、厳冬の線路の上で綺麗に切断されたせいで、しかも運悪く切断された瞬間、女の子がしっかり息を止めていたせいで、傷口が凍りついて、またたく間に塞がってしまった。出血が少なかったので、轢かれた直後、女の子はまだ生きていた。慌てて電車から降りてきた車掌が女の子に駆け寄ったけれど、上半身だけで這い寄ってくる彼女の姿を見て恐怖に腰を抜かしてしまう。私の脚、私の脚、と、うわ言のように言いながら迫ってくる女の子からなんとか逃げようと、車掌は死に物狂いで逃げ、線路脇の鉄塔によじ登るが、途中で手を滑らせ地面に転落、頭を打って死んでしまった。やがて警察が到着し現場を調べたところ、事故現場は車掌の死体の他に女の子の下半身の肉片が散らばっているばかりで、上半身が消えてしまっていた。上半身だけの女の子は、今でも自分の脚を探してさまよっている」

ああ。知っているな、私は思いました。かなりメジャーな話じゃないですか、これって。でも、バリエーションは色々ありますが、イクスなんて名前ではなかったと思いますけれど。

少年は続けます。

「この話を聞いた人の元には、夜眠っている間に脚を探す女の子がやってくる。女の子に目をつけられると、脚を切り取られて死んでしまう。それを防ぐには、寝る前に息をしっかり吸って

吐く、これを繰り返して、息を止めないようにして眠らなくてははいけない。そうすれば、イキス様が女の子から守ってくれる」

……は？

「え、女の子の名前がイキスっていうんじゃないんですか」

「違う。イキス様は守ってくれる神様の名前」

「唐突すぎるでしょう」

「機械仕掛けの神はいつも唐突」

「そういうものですか」

まあ確かに、お話として完成度が低すぎる感じがします。この怪談、流行らないでしょう。普通は、何か言われるからこう答えれば助かる、みたいなのが続くものですよ、この手の怪談って。脚をくれ、と言われたら、今使ってます、って答えると助かる、とか。

それこそ、私が『アシキ』の都市伝説を自主ゼミに持っていった時、みとはちはすぐに言いました。対処法があるのが都市伝説っぽい、と。そこが適当ではちょっと……。

「確かにこの話、そんなに面白くないと思いますけど、『謎がない』ってどういうことですか？」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

「わからないのか？ おかしいだろう、この話」

「え……」

私は改めて考えます。凍えるほど寒いから傷口が塞がった下りでしょうか。いやまあ、確かにそんなあるわけないだろという感じはしますが、そのことでしょうか？ 多分そういうことじゃないですよ。であれば、イキス様が守ってくれる下りでしょうか。

「ああ……。そういうことですか。『息を止めないようにして眠らなくてはならない』っていう」

「そこだ」

「確かに、ちゃんちゃらおかしいですね」

寝る前に息をしっかりと吸って吐く。これを繰り返して、息を止めないようにして眠らなくてははいけない。

「だって、息を止めて寝たら死んじゃいますからね」

だからあの話を聞いた人は、必然的に、絶対確実にイキス様に助けてもらう事ができる。助けてもらったことになる。

「上半身の怪がお前から脚を奪いにくるけれど、イキス様が助けてくれたのだ、ということに自動的にになってしまう。危機が勝手に来て勝手に去っていく。そういう仕掛けだ」

「なるほど」

「こういうのは謎がなさすぎて嫌いだ。苦笑いした後、なんにも残らない。どうせ都市伝説、信憑性はない、なんて思いながら、でももしかしたら、って思えるような話が良いじゃないか」

少年は語ります。一理あると私は思います。そうですね、夢がないと。こう、少しだけゾクッとさせられる、もしかしたら、の感情。それが醍醐味ですよ。

.....あれ。なんだかずいぶんと、話し込んでいた気がします。どうしてこんな話になったんですって。

ぐると少年が顔をこちらに向けます。

「だからさ、俺は異世界に行けるかどうかもう一度試すから、次は邪魔をするなよ」

少年の目が一瞬、またしても、深い紫色に輝いたような気がして、私は動けずにいます。エレベーターが七階に到着して、扉がずると開きます。このエレベーター、七階に来るまでものすごく時間がかかっていませんでしたか.....？

少年はそれきり黙ってこちらを見えています。もう会話イベントは終わったから、とでも言いたげな、ゲームのNPCのように。こちらの様子を、じっとうかがって。自分の企みが成功するかどうかを、じっと見守るその二つの目。私はその目が、あるいは今聞いたばかりの出来の悪い都市伝説の内容が、どうにも心に引っかかって離れなくなります。

*

「おかえり」

「ただいまです」

部屋に戻ると香織はさっきと変わらない体勢で本を読んでいた。

「私が行って帰ってくるのに、どれくらいかかりましたか？」

「え？」

「いえその、変に時間がかかっていたりしましたか？」

「いや、別に.....どういうこと？」

うーん。まあ普通、時間を測ってたりはしませんよね。

「いえ、ちょっとコンビニで悩み過ぎたかなと思ったので」

「何を悩んでたの」

「ダブルチョコオールドファッションにするかミルクチュロッキーにするかです」

私はダブルチョコオールドファッションを袋から取り出しながら言いました。

「え.....またそんな、夜に重いものを.....」

「何か問題でも？」

「良いけど.....」

私はダブルチョコオールドファッションを頬張り、カフェラテをすすりました。口の中でチョコ生地がいい感じにカフェラテを吸います。

「ああ、鹿島だから息栖なんですね」

私は唐突に気付いて言いました。

「え？」

香織が顔を上げます。

「いえ、ちょっと変な都市伝説があって、内容が明らかにカシマさんのアレンジで、タイトルがイキスさまだったんです」

カシマさんというのは、例の上半身の怪の名前で、多分鹿島神宮とは関係ないですが、イキスさまの名前をつけた人はその連想で名前を適当に決めたんでしょう。鹿島神宮、香取神宮、息栖神社は東国三社と言われる結びつきの深い神社です。うーん。雑です。

「都市伝説も作者の巧拙が結構出ますよね……」

私はミルクチュロッキーを袋から取り出しながらそう言いました。

「は？」

「なんですか？」

「いや、ミルクチュロッキーも買ってんじゃん」

「はい、何か問題でも？」

「ダブルチョコオールドファッションにするかミルクチュロッキーにするか悩んだとか言って結局両方買ったのかよ」

「悩んだんだからしょうがないじゃないですか」

私はミルクチュロッキーを頬張り、カフェラテをすすりました。口の中でミルク生地がいい感じにカフェラテを吸います。

「十一時だぞ。さすがにこの時間に二つは多いでしょ」

「そんな事ないですよ。だってドーナツってこんな大きな穴開いてるじゃないですか。スカスカですよ。体積的には二つ食べてもまだ一つ分以下ですね」

「アメリカの警官みたいな言い訳をするな」

「いよいよ明日が最終日ですからね、万全の体勢を敷かねば」

そうですよ。明日が最終日です。

決着を付ける時です。

*

最近はどこかのビジネスホテルも、チェックアウトはカードキーを箱に入れて終わりというところが多いです。それなのに私がわざわざカウンターに立ち寄ったのは、朝置きたら部屋の入り口の扉の下に、『チェックアウト時に受付にお越しく下さい』のメモが差し込まれていたからでした。

「何かやらかしましたかね」

「いや、別に心当たりないよね……」

香織と二人でそんなことを言いながら受付に申し出れば、なんのことはない、郵便が届いているということでした。受け取ったのはA4判の封筒。差出人の名前は無し。ですが私が泊まる場所を教えているのは、両親を除けば一人しかいませんし。

こっそりと、ロビー横のトイレで封を切れれば、入っていたのはなかなかどうして、普通は手に入りそうもない資料でした。

「みとはちさん、どうやってこういうの取ってくるんでしょうね……」

私は半ば畏敬に近い気持ちでつぶやきます。

真っ直ぐな朝の国道を車が走る。屯田団地って直球な地名だなあとか、この道路の端を表示する矢印は面白いけど役立っているシーンで運転したくはないなあとか、真敷別川って名前読めないなあとでも綺麗だなあとか、益体もないことを考えて、僕は緊張を遠ざけようとする。

やがて車は市街地を抜け、空が広くなり、周囲に田園風景が広がり始める。燈花が窓を少し開けると、さっぱりと乾いた風が吹き抜ける。

「気持ちがいいですね」

「うん」

国道は一旦内陸に折れ、峠を越えてトンネルを抜け、やがて海岸線を走る。左手には海、右手には草原が広がり、留萌まで100キロの表示が見える。

「向こうに見えている山が目的地だそうです」

「あれが」

僕を助けてくれるという神社は、あの六峰山という山の山中にあるらしい。一時間かからずに登れるという話だったけれど、ここから見ると結構険しい山に見える。

「ところで、香織は本当にこんなところに神社があると思いますか？」

「え……」

「いえ、あるという話ですから、多分あるんでしょう。ですが、こんなところにある神社が、それほど有力なのか、という意味です」

それは確かに、燈花の言うことはもっともだと思うけれど。

「基本的には、ここはヤマトタケルや、それどころか坂上田村麻呂も到達してない土地なわけで、神社にいるようなニッポンの神様がやってくるのは遅かったわけですよ」

燈花は『ニッポンの』のところで指をクイクイとエアクオートするけど、ハンドルを握りながら片手でやってもクオートできていなかった。

そう、道南ならまだしも、ここは石狩だ。神社が立ち始めるのはせいぜい江戸時代、増えたのは開拓使時代ということになるだろう。

「しかもその神社が、狼に関係しているというのが、いまいち……」

「そのとおりです」

開拓期の日本人にとっては、狼は家畜を襲う憎むべき存在だ。実際、開拓使が展開した積極的な駆除によってエゾオオカミは絶滅に追いやられたと言われている。いくらかつては神格化されていたとはいえ、その時代に建てられた神社が、狼を祀るということはあるだろうか？

「ええ……でも、燈真さんの情報でしょ？」

「父が聞いてきた情報です。父がその後連絡を取ってくれたらしいので、神社自体は実在するんでしょう。ただ、伝聞ですからね。誰から聞いたのか、この間確認したんですが、その情報源もイマイチ信頼できなくて」

え。それ大丈夫なのか。というか、それ今言う？　ここで？

「とはいえ、今はこれしか頼れる情報がありません。それに、どのみち狩人に命を狙われている

以上、行ってみるしかないです。ここまで来たのですから。ハイキングだと思って登りましょう」

*

登山口の駐車場に車を止める。駐車場と言ってもただの開けたスペースで、僕たちの乗ってきた稲荷木家のアクア以外に車はない。端の方に登山口を示す看板と、小さなトイレがあるだけだった。神社を示すような表示もなければ、地図もない。

「本当にこの上にあるの？」

「甚だ怪しいと言わざるを得ませんね」

登山口の看板には、山頂まで50分、と書いてある。神社に関する案内はない。神社というのは山頂にあるのか、それとも途中にあるのだろうか。

「でもほら、見てください」

燈花がスマホを差し出す。見ればグーグルマップ上に『六峰神社』がプロットされていた。

「星1つです」

「低い」

「通常に比べて混んでいます、とのことですよ」

「それ僕たちの位置情報カウントされてるんでしょ？」

「というか通常を示すグラフが平坦すぎた。」

「山頂少し手前のところに社があるようです。どれくらいの大きさなのか分かりませんが……」

「というかその、神職という人はそこにいるの？ この山の上に？」

「いるんじゃないですか？ そういう話ですし」

「いや、行ってみて今日はいませんとかだったら登り損じゃないか。」

「まあまあまあ、行きましょう。ハイキングだと思って」

ハイキングではなかった。

始めこそ踏みならされた山道だったが、途中から岩場が多くなり、そこそこに張られたロープを使って身体をなんとか引っ張り上げていく状態になった。燈花がどこからか取り出した軍手を借りて、全身汗だくになりながら登っていく。風が吹いている間は涼しいが、無風の瞬間は暑くてたまらない。途中途中で、燈花が見慣れない綺麗な花なんかを見つけて教えてくれるのだが、途中からそれに返事をするのもつらくなってくる。500ミリリットルのペットボトルが一瞬で無くなり、こんなことならもっと買えばよかったと思うと、燈花の背負ったリュックサックから2リットルのボトルが出現した。準備が良い……。

僕はまた、この山を登った先にあるもののことを考えていた。とりあえず情報は信頼するとして、本当に神社があって、神職がいて、僕の狼を外してくれた場合の話だ。狼がいなくなれば、僕は安全かも知れないけれど、丸裸だ。先に行く燈花の後ろ姿を見つめる。その時、燈花は僕のことをどう見るだろう。

そんな余計なことを考えて、漫然と登っていたからだろう。

「うわっ」

僕は足を踏み外し、大きくバランスを崩してしまう。とっさに手を伸ばしたその先に。

「っと……気をつけてください」

燈花の僕よりも一回り小さな手が、僕をつかまえる。

「ありがとう」

「大丈夫ですか？」

けれども僕は目を逸らしてしまう。燈花の目に覗き込まれるのが、なんだか今は怖い。

「大丈夫だから、行こう」

ゆっくり登っているとは言え、もうすぐ一時間くらい登っていることになるから、じきに着くのではないかと訝しがり始めたとき。一気に空が開けて、展望台のようなスペースに僕たちは到着した。

それは急峻を抜けた登山者へのご褒美のようで、吹き抜ける清涼な風の先に、絶景が広がっていた。

「おお……これは……」

そこは頂上の手前のピークで、周囲の大地をぐるりと見渡すことが出来た。登って来た側の西側には平坦な海が青々と広がる。反対側には遥かに続く起伏に富んだ森のカーペットが静かに続き、彼方に雪を戴く岩山を望む。それは、僕がまるで見たことがない種類の絶景で。登ってくる途中の鬱屈とした気持ちが、一気に吹き飛ばされてしまうような。景色が良いというだけで、こんなに気分が良くなってしまふなんて、自分のばかばかしさにもう笑ってしまいそうで。

「いい景色……」

そうして思い出すのは、燈花と二人並んで見た、あの景色。

気づくと僕たちの手は、また繋がれていて。

けれど燈花が首を振ったかと思うと、汗と土で汚れた軍手を外しはじめて、僕も苦笑しながらそれに倣う。

今度はお互い汗ばんだ手のひらを、しっかりとくっつけて。

「東京の景色と、どっちが好きですか？」

あの時二人で見たスカイツリーからの景色。残念ながら夜景じゃなかった景色。

「どっちも好き」

「ええ」

「狼的にはこっちのほうが好きかな」

「狼的とかあるんですか？」

「燈花のきつねうどんみたいに分かりやすいのはないけれど」

「別に私は、狐の血がなかろうがきつねうどんを愛していたと断言出来ますよ」

断言出来なくていいよ。

「あのさ、燈花」

「はい」

いいですよ、とばかりに燈花が僕の手を握り直す。

「なんだか色んなことが急すぎて、よくわからなくなったんだけど、でも……」

その手がすごく、あたたかい。

「来てくれてありがとう、燈花」

僕たちは互いを見ていなかったけれど、横に並んでいるだけなのだけれど、隣にいる燈花が微笑むのが分かった。

「前に言いましたよ。もともと私のせいなのですから」

「それでもありがとう」

「はい」

「燈花と一緒にいてくれるから、この十日間、夜眠るのが怖くなかった」

「そうですか？」

「うん、僕が眠っている所を、横で見張っていてくれるんだと思うと」

「いや、私も寝ますけどね」

「それはそうだけど」

そうだけど、そうなのだ。そりゃあもちろん、同じベッドに燈花がいると、別の意味でドキドキすることはあるけれど。けれど、隣に信頼できる人がいると言うだけで、僕はこんなに安心できるんだと、この旅行ではじめて気付かされたのだ。

「あのさ」

「はい」

「この間、スカイツリーの展望台で言ったことだけれど」

こんなふうに、二人で並んで、東京の街を見下ろしながら言ったことだけれど。今度は前より、自然に言えると良いのだけれど。

「僕はもっと、燈花とずっと一緒にいたい」

「……はい」

「燈花に見られるのは、燈花に知られるのは、ちょっと怖いけれど、燈花になら良いつて、思えるようになってきたよ」

僕を知るのは僕だけでいいと、以前は思っていたけれど。それは僕を形作る、変わらない芯のようなものだと思っていたけれど。こんなに簡単に、変わってしまう。

それは認めてしまうのはとても恥ずかしくて、僕は彼方の山々に目を細める。隣で燈花がふふ、と笑う。

「不安なのですか？」

ぞくり、と鳥肌が立ち、顔が火照るのがわかる。そう、気付かれている。見通されている。知られている。

「……うん」

不安なのだ。こんなことを言い出すくらい、不安なのだ。

あの日。燈花は、僕について、こう言ってくれた。

分からないところがあったのです。だから気になりました。もっと香織のことを知りたいと思いました。

そう、そしてその『分からないところ』とは。

燈花の母親譲りの血を持ってして見えなかったこととは。

僕の中の狼だった。

だけどこれから僕は、狼を捨てる。

それはつまり、燈花にとっての僕の謎が、解けてしまうどころか、消滅してしまう事にならないのだろうか。燈花は僕に対して、完全に興味を失ってしまいやしないだろうか。狼も火鼠もいなくなれば、僕は自分を監視する必要はないだろう。自分を知り尽くす必要はないだろう。そうになったら、それは燈花もおんなじで、僕のことを知ろうだなんて、もう思ってはくれないのではないか。

「みっともないけど、僕はそれがずっと不安で。気が重くて……」

堰き止めていた不安が溢れて、僕は泣きそうになってしまう。

「ふふ、それはですね、実は心配無用なのです」

けれど燈花はそう言って、優しく僕を覗き込む。

「それに関しては、母と同じ話をしたことがあるのです」

「……お母さんと？」

「ええ。母は、私の何倍も見えます。物陰から一目見れば、姿の見分けがつかぬほど化けられる。二歩歩くのを見れば、動きまで余すところなく写し取る。三言喋るのを聞けば、物言いから頭のなかまで真似られて、誰にも区別が付けられなくなってしまう……。それくらい、僅かな情報からでも人間を見通してしまうのです」

元伝説の半妖狐『アシキ』にして、現在は燈花の母、稻荷木二色さん。

「そんな母ですから、私は結構、疑問だったのです。そこまで見えてしまったら、人に飽きてしまうのではないかと。だってひと目見るだけで分かってしまうんですから」

燈花は続ける。

「そうしたらですね、それこそ全部お見通しみたいな顔で言われました。飽きる前に変わる、と」

「変わる……？」

「それこそ燈花、お前が生まれてくる時の話じゃが」

燈花は声真似で言った。

「じゃがって」

似合わない。

「変身してやったほうが良いですか？」

「それも怖いからやめて」

仕方ないと言った顔で、燈花は口調だけ真似て続けた。

「お前が生まれてくる時、儂は二つ心配事があった。一つ目は、儂が母親になれるのかということじゃ。何しろ、儂には母親というものがわからん。儂が生まれる時に死んでしもうた。父親す

らわからん。すぐに消えてしまった。じゃから親らしいやり方というのは皆目見当もつかなかった。燈眞もあれで、親とは色々あったようじゃしの。それがまず不安じゃった。二人して不安じゃった」

「結果を言えば、これは今じゃから言えることではあるが、別に不安がることはなかったの。儂は自分が良い母親になれたかどうかはわからんが、燈花、お前が儂の子だということは胸を張って言えるわ。それだけで十分じゃな」

「もう一つ不安じゃったのが、お前が今更ながらに気付いたそれじゃよ。つまり、『ひと目見れば』の儂が、子育てに取り組めるのか、ということじゃな」

「ひと目どころではない。自分の血が半分も入った子供と、四六時中一緒にいるわけじゃ。そんなもの、はっきり言って丸見えの全見え、見え見えパラダイスじゃよ。見えパラじゃ。今だってお前が考えていることなんぞ、全部分かるわ。これは本当に全部じゃ。いま見えパラってさすがに何だよと考えたじゃろう」

「じゃがな。育てはじめてすぐ分かったのじゃ。今日のお前が全部分かって、明日のお前は分からない」

「時間、じゃよ」

「人間は時間で変化してしまう。子供なぞ尚更じゃ。昨日出来なかったことが今日には出来る。今日わからなかったことが明日にはわかる」

「一番身近な燈眞が変に安定しすぎとるせいで、考えても見なかったのじゃな」

「毎日毎秒、それだけ育っていくお前を、今日知り尽くしたところで、それが何になろう。今日の知悉は明日の無知、通曉のちまた夕闇来たる、じゃ」

「それが分かってからは本当に楽しかったぞ。明日はどうなるか、この子は次はなんと言うか、楽しみで仕方がなかった」

「儂らは人が見える妖狐であっても、未来が見える占い師ではない。この役割分担はなかなかよく出来ておるの。じゃから、人に飽きるなんて傲慢なこと、ありはせんじゃよ」

語り終えた燈花は、柔らかい髪をゆらゆらさせながら、微笑んで言った。

「ですから、私は何も心配してません。香織はずっと同じじゃないのですから」

.....そうか。僕が一人で悩んでいたことも、稲荷木家では解決済みか。

「というかですよ。それ以前に私、どれだけ香織のことが読めていますか？」

「.....え、結構読まれてると思ってたけど」

「偉そうに言えることじゃないですが、香織に勝手に変身した件にしろ、弘前公園で爆走した件にしろ、全然読めてないじゃないですか」

「偉そうに言うな」

「わはは」

「わははじゃないよ」

「だから全然、私は物足りないですよ。香織のこと、まだまだ知らないといけないですよ。狼がいるとかいないとか、あんまり関係ありません。私も香織と一緒にいたいし、もっと知りたい」

握りしめた手が熱い。火照る身体を、清冽な風が撫でる。

「そう言えば、母の話をして思い出しましたが、あの変身が気に入らないのです」

「あの変身？」

「母が香織に変身したことです」

「狩人に狙撃されたってときの……？」

「そうです。あそこで化けられるのは、香織がうちに来たときに母に見られたからです。つまり香織のことが全部母に知られているのです」

まあ、そういうことになるのだろう。

「母親がライバルとまでは言いませんけれども、あそこまで完璧に香織を知られているのは、やはり気に入らないのです」

「はあ……」

「それが気に入らないので、変化を加えたいと思うのですよ」

「変化？」

「そうすれば母が知っている香織はもう、香織じゃなくなりますから」

燈花がこちらにひたと寄り添って。

「子供なら日に日に勝手に変化するんでしょうけど、私たちもう子供じゃありませんから」

「そうだね……え？」

もう片方の手が、燈花に捕まえられて。

その眠そうな、けれども今日は上気した瞳が、風に揺れながら近づいて。燈花の言葉はほとんど囁き声になって。僕はもう、予想してしまう。期待してしまう。そして予想と期待が、燈花に知られている。知られていることを知っている。

「強制的に、上書きしようと思うのです」

そっと触れた唇は、僕を上書きして溶かしていく。

展望台代わりのピークから尾根をつたって少し歩く。登山口付近の手入れされた人工林と違い、いつの間にか周囲の木々は古くなり、僕たちの時間は止まり、閉ざされていく。研ぎ澄まされた空気がこちらに視線を向け、僕たちをじっと観察している。細められた目の向こうに、敵意もなければ親しみもない。ただ、その場は僕たちを見つめている。

ふと木々が左右に消え去ると、それは明らかになった。

くすんだ木製の鳥居。けれどもそれはよく見知った鳥居とは少し違う形で、左右の柱を支えるように一回り小さな柱が前後についている。更に、鳥居の上の笠木にも、小さな柱の上にも、屋根のようなものがついている。

「巖島神社にあるタイプですね」

「そうだね……」

名前は忘れてしまったけれど。それがどんな意味だったかも忘れてしまったけれど。

鳥居をくぐったその先には、あまりにも突然に、まるでそこだけ切り抜かれたかのように、空間が広がっている。

「ここか……」

その自分の声が、やけに響くように感じられる。時折聞こえていた鳥の音が、もうどこにも無い。参道を挟むように、小さな手水舎と社務所らしき建物があり、その先に大きな狛犬が鎮座する。正面には簡素な、しかし威圧感のある拝殿。決して大きな建物ではないし、神社としての規模が特別大きいということはないだろう。けれど、こんな山奥に、どうやってこんなものが建つというのだ。狛犬がギロリとこちらを睨んでいる。よく見れば、案の定それは獅子よりも狼らしい体躯で、鋭い眼光を投げかけている。

ついに到着してしまったようである。

「ごめんください」

僕は言ってみる。しかし、返事は返らない。

社務所らしき建物に近づくと、引き戸がわずかばかり開いている。

「ごめんください」

もう一度中に呼びかけてみるが、答えはない。

「入ってみましょうか」

燈花が言う。戸締まりがされていないあたり、中に人がいるかも知れない。もう一度だけ呼びかけてみて、それでもやはり応答はなく、僕はそっと戸を開けた。

三和土に靴は無いが、室内は綺麗に掃除されているように見える。管理が放棄されて荒れ放題という光景も覚悟していたが、そうではない。少なくとも人がいるのだ。今この瞬間にいるかどうかはともかく。靴を脱いで上がると、雑然とした座敷と、トイレに洗面所、後は倉庫のような部屋が見て取れた。

座敷の真ん中、卓袱台の上に、紙片が置かれているのが目に入る。

「何か書いてありますね……」

燈花がそれをひょいと拾い上げ、僕もそれを覗き込めば。

神谷内殿

遠い所ようこそおいでなさいました。お迎えに上がれず申し訳無い。どうか手水舎で身を清められ、左手から拝殿に起こしてください。お連れの方はどうぞこの座敷でお待ち下さい。

「ははあ……」

燈花がつぶやく。僕の胃はぐるりとうねり、緊張が一気に昇ってくる。

「案の定、ですね……」

ここに来る直前、さっきの展望スペースで燈花と話した、『作戦』。まさに、そのとおりの展開になりつつある。

*

「反省したのです。私は」

すまし顔で燈花は言った。それは反省している顔にはあまり見えなかったけれど。

「だから今度は、予め私の作戦を、いえ今回は作戦というほどのものでもないのですが、香織に伝えます。そのうえで協力してほしいのです」

けれど、燈花の説明してくれた推理は、そう簡単には僕には信じられないものだった。

「私の読みどおりであれば、おそらく神社に着くと、香織一人で来るように指示されるはずなのです。もしそうなったら、私を信じて、この作戦でいかせてください」

*

拝殿に向かう廊下を歩く。木々の間から陽の光が差して、ここが人里離れた山奥であることを意識させる。この先には、この六峰神社の神職がいるということになるけれど。僕を待っているということになるけれど。

拝殿の入り口の短い階段を重い足取りで登ると、儀式でも行うスペースなのか、陽の光を遮られた薄暗い板の間が広がっている。奥には御神鏡を中心に三方や御幣が置かれ、やはりここが神事を行う場であることが見て取れる。張り詰めた空気の奥、薄暗がりの風はひんやりとして、僕の背筋を撫でる。

ふ、と、何かのにおいがする。懐かしく、心の奥の方をついばまれるような、落ち着かないにおい。僕はこのにおいを、知っている。

「ようこそ」

柔らかな声が、空間をビリリと震わせる。いつの間にかそこに立っていたのは、烏帽子を被り朱色の狩衣を纏った神職だった。ひと目見て、その顔は僕の想像よりも年老いていることが分かるけれども、しかしその眼光は鋭く、僕の疑念をしっかりと見据えてくる。

「神谷内香織さんにお間違いないね」

発せられるその声に、僕は聞き覚えがない。けれども僕はこのにおいを、知っている。

「はい」

「遠い所本当にご苦労でした。早速始めましょう。そこに座って」

そう言って指し示した空間に、先程まではただの板の間だった中空に、見れば腰掛けが一つ。

僕がそこに座ると、ドオンと太鼓の音が響く。驚いて目を上げるが、神職が号鼓を打ったような素振りはない。何かがおかしいのではないかと僕は思う。

神職は御神鏡に礼をし、祓詞を唱え始める。

かけまくもかしこきいざなぎのおおかみ――。

僕が知っているのはそこまでで、その先の言葉は何を言っているのかわからなくなる。神前であり、本来は心を落ち着けるべき場なのに、僕は神職の後ろ姿を食い入るように見つめる。あれは。燈花の言う通りならば、あれは。

「少し頭を下げて」

神職が大麻(おおぬさ)を持ち、僕の頭上で左右に振り、穢れを祓う。ざわり、ざわりと大麻の揺れる音。その向こうに、やはりあのにおいがする。僕は知っている。このにおいを、知っている。ざわり、ざわりと大麻が揺れる音。甘いような。煙たいような。ざわり、ざわりと大麻が揺れる音。

.....少し長くはないだろうか、と思い始めたその瞬間。

ピシリ、と首筋に痛みが走った。

「な.....」

「そのまま頭を下げて」

鋭い声で制され、反射的に僕は動きを止める。遅れて、今何がおきたのか、何が置けているのか理解する。

僕の首元に貼られた狼が剥がされようとしている。

「あ.....く.....」

そのまま頸椎を走る神経まで抜き取られていくような鋭い痛みと脱力に、僕は声を上げることが出来ない。ざわり、ざわりと大麻が揺れる音。レモンとシロップと草とを煮詰めたような、甘くて煙たいあのにおい。全身が燃え上がるように熱く、額に噴き出した汗が顔をつたって垂れ、その雫が板張りの床に着くまでの数瞬が無限に分割され、引き伸ばされて、いつまでもいつまでも、遠く。

吸うことをもう何年も忘れていた息を大きく吸い込むようにして顔を上げると、神職はすでに僕の前を離れ、手にした札を御神鏡の前の三方に載せている。

狼の姿の描かれた札。

間髪をいれずなのか、僕の意識が絶え絶えになっているのか、区別がつかないままに、神職は続けて祝詞を奏上する。その言葉が何を言っているのか、僕にはもう分からない。僕は大きく息を吸う。息を吐く。震える手を首元にやれば、そこにはなにもない。札は無く、傷もなく、痛みも無い。喪失感もなければ、安堵もない。手のひらを見やれば、そこにもなにもない。君には見

えないんだから、と頭の中で声がする。僕は落ち着くために深呼吸をする。深呼吸をする。そうしているうちに祝詞は終わる。神職が深く礼をし、何事か鈴のようなものを鳴らす。その音が脳に染み込み、僕はやっと本当に落ち着きを取り戻しつつある。最後に神職が二礼二拍手一礼し、僕の方に向かって、微笑みながら歩み来る。

「こちらで終わりです」

「終わりにしてもらっちゃ困ります」

その声は。僕から発せられたものではなく。

「まだ、終わりじゃありませんよ、藤木先生」

けれども紛れもなく僕の、神谷内香織の声だった。

「おっと……」

神職はゆっくりと言った。

「お連れの方は待合室でお待ちいただく手はずだったのだが」

背後から登場した僕のドッペルゲンガーは、僕の姿形で、僕のような動き方で、僕の声と頭の中をして、言う。

「それです。あの書き置きではっきりわかりました。もし藤木先生なら、燈花をこの場から遠ざけようとするだろうと思ったんです。どんなに不自然だろうが、燈花がここに来てしまうのはどうしても嫌だ。燈花に姿を見られたら困るから。狐に見られたら一瞬でその変装がバレてしまうから、僕一人で来るようにしたんでしょう」

神職の目は笑っていない。

「はて、変装とは。何のことだか」

「だってそれ、衣装のウラヅキで借りたでしょう」

「は？」

「それ、『不思議な力を持っていそうな神職の装束セット（二級上）』でしょう」

「え」

「僕のバイト先で借りるって、本気で変装する気あるんですか？」

まあ、僕のバイト先で僕の衣装借りたやつもいたけどな。

神職は肩をすくめ、観念したように顔を撫でると、その顔は僕の見知った顔だった。

「やれやれ、簡単にバレるもんだね。バレバレ入道かな」

「「バレバレ入道ってさすがに何だよ」」

*

「しかし、なんだって神谷内くんが二人に増えているのかな。別に稲荷木くんの姿のまま来たって良いだろうに」

「演出上の都合ですよ。これは僕の問題だから、僕が知らなければならない。燈花とはあんまり関係ないですから」

僕のドッペルゲンガーは言う。

「さてはて、一体何を知らなければならないって？」

「その狼の意味です」

僕は言う。

三方に置かれた狼の札。

「藤木先生、あなたはわざわざ、手下の無量という女を使って、燈花のお父さんに情報を吹き込んで、僕たちをこの神社に誘導した」

僕のドッペルゲンガーが言う。

「そのうえで、変装して僕たちを出迎え、その御札を回収した」

僕は言う。

「先生は公安から追われる身ですが、それにしたって相手が僕だったら、変装する必要はないはずでしょう。普通に現れて、普通に御札を回収することも出来たはずだ。それなのにわざわざ変装して、できれば自分だと気付かれずにことを運ぼうとした。なぜか」

僕のドッペルゲンガーが前に出る。僕たちは交互に言葉をつなぐ。

「みとはちさんに頼んで、先生の身元を調べてもらいました。大学教員、その前は高校教師、けれどもおそらく本職は文化庁で妖怪を保護する人、そしてそれらとは別に、先生あなたは、『日本にオオカミを取り戻す会』の創設メンバーだそうですね。本まで出してる。あなたは狼を、動物としても神としても、日本に復活させようという思想を持っている」

曰く、日本からオオカミが絶滅したことで、生態系はピラミッドの頂点を失い、バランスが崩れた状態にある。それがシカやイノシシの大量発生に繋がり、様々な害をもたらしている。同様に、日本人が山の神の頂点たる狼に対する信仰を失ったことで、山の怪異のバランスも崩れてしまった。

「だから僕にその狼を背負わせたのも、実験なり、育成という側面があったんじゃないですか」

藤木は肩をすくめ、それで、と先を促す。

「あなたはその狼を無事に回収して、『狼の再導入』に使うつもりなんだ。僕が燈花を攻撃しかけたことで、十分に狼が成長したと判断したんでしょう。けれどその回収の事実を、利用の事実を、出来れば僕には知られたくない。僕を利用したんだってことを、出来れば隠しておきたい。だから自分で回収するんじゃなく、全く別の専門家に処分してもらった、という状況に誘導したんだ。そうじゃないんですか」

僕のドッペルゲンガーは言う。

「僕はそれを知りたい」

僕は言う。

「藤木先生を恨んだりしませんよ。一部でも、ほんの一部でも良いから、僕を怪火から救おうとしてくれたのなら、ついでに利用されていたのだとしても、それでいいです。いや、贅沢は言いません。助けるついでに利用したんじゃなくて、利用のついでに助けてくれたのだから構わない。先生には色々とお世話になりましたから。そう言ってくればいいのに。こんなふうに、隠さなくたって良いじゃないですか」

藤木は困ったような微笑みを浮かべて、何かを言いかける。僕は心臓が気持ち悪くよじれるのを感じる。台本はここまで。この先に何があるのか、僕は知らない。僕は知りたい。

燈花から教えられた情報と、これまでの状況は見事に繋がりあって、藤木先生の真の目的は明らかかなように思える。けれど同時に、彼が僕をただ利用して、狼の育成に使っているだけだということを、僕は素直に認められない。藤木先生がそんなに完全な悪者だと、僕には認められない。せめて、せめて少しだけで良いから、僕を助けようとしてやったのだと言ってくれればいい、そう縋りたくなってしまふ。

僕は藤木先生の答えを待つ。

けれど、言葉が発したのは、彼ではなかった。

「そう、思っていました。今朝までは」

僕のドッペルゲンガーが発したそのセリフは、僕の台本にはなかった。

*

「ここからは、香織の口から言わせるのは申し訳ない話です」

見れば、僕のドッペルゲンガーはすでに僕ではなく、稲荷木燈花の顔と声に戻っている。服は僕の服のまま、恐ろしく似合わない。

「おやおやどうしたんだい稲荷木くん。久しぶりに会ったら、ずいぶんと服のセンスが変わったね」

「恋人の影響です」

ほう、と藤木は笑う。

「ごめんなさい、香織。作戦の後半を伝えていませんでした。これは藤木先生の前で、私一人で、言わないといけないと思ったのです。ごめんなさい」

僕は呆然とする。一体何を言おうというのだ。

「みとはちさんが、働きすぎてしまったらしいのです。先生の身元を探ることしか最初は頼んでいなかったのですが」

そうして燈花は、封筒を取り出した。今朝、ホテルのロビーで受け取っていたものだ。大したものじゃなかった、と言って僕には内容を教えてくれなかったけれど。

「これは五年前の消防と県警の、金沢市内連続放火事件の捜査資料です」

はじめて藤木の顔が、驚きに歪む。

「セオリー通り、占い師を先に噛んでおくべきだったんじゃないですか、先生」

*

■実況見分調書（火災番号××××× 平成××年10月××日）

表記の火災について、関係者の承諾を得て次の通り見分した。

調書作成者 ××消防署 消防司令補 ××××

見分場所 ××市立錦ヶ丘中学校 新棟屋上

立会人 市立錦ヶ丘中学校 学校長 ××××

□現場の位置及び付近の状況

現場は金沢城址から県道31号線沿い南東に約900メートルに位置している。県道31号線沿いは中高層の建物が並ぶが、内側に入ると住宅地が密集している。都市計画法による用途地域は、準住居地域で、防火地域に指定されている。消防水利は、市立錦ヶ丘中学校プールに加え

、半径100メートル以内に消火栓3基が配置されており、良好である。

現場は、市立錦ヶ丘中学校の敷地内南西側に位置する新棟の屋上で、対面する南西側の敷地境界は幅員3メートルの私道で、日中でも人通りは少ない。

現場付近の状況は図1に示すとおりである。

□り災状況

焼損しているのは、市立錦ヶ丘中学校の防火造4階建校舎の屋上南側の半径1メートル程度の範囲の床面及び排水溝の落ち葉等の堆積物並びに樹脂製の容器である。

屋上床面を見分すると、床面は塩ビ防水シート仕上げで、表面が半径1メートル程度黒く煤けている（写真1参照）。建物周縁部の排水溝に堆積していたものと見られる落ち葉が焼け、灰となり周囲に散乱している（写真2参照）。落ち葉が焼けたものと見られる灰の中に、樹脂製の容器があり、焼損が激しく原型を留めていないが、一辺が3センチほどの直方体であったと考えられる。燃え残っている直方体の三面の内側の焼損が特に激しく、真黒になり一部溶融している（写真3参照）

*

■鑑識・鑑定等結果書（火災番号xxxxxx 平成xx年11月xx日）

表記の火災の資料 第xx号樹脂製容器 について、鑑識・鑑定を実施した結果は次の通りである。

□鑑識見分内容

容器は一辺約3センチの直方体のうち三面が残存し、残りの三面については焼損し溶解したものと認められる。容器は難燃ABS樹脂製であり、厚さ1ミリ程度であり内部が中空であったものと推定される。内部の付着物の分析によれば――――

*

■鑑識・鑑定等意見書（火災番号xxxxxx、xxxxxx、xxxxxx、xxxxxxおよびxxxxxx 平成xx年12月xx日）

表記の一連の火災の資料に関する意見照会につき、以下の通り申し述べる。

意見書作成者 xx市 怪異福祉局 指導監査課 課長代理（精密検査担当） xxxxx

□意見内容

実況見分内容及び鑑識見分内容より、本件資料は無登録の鬼火発生装置である疑いがあり、速やかに怪異福祉局ないしは公安妖異局による精密検査を実施されたい。

*

その捜査資料は、いずれの不審火現場でも、共通する時限式鬼火発生装置とやらが火元になっていたという記録を残していた。

中学校屋上。

ビジネスホテルの一室。

犀川大橋の自動車。

日宮神社の拝殿。

そしてオフィスビルの天井。

「消防、警察、怪異福祉局と事案がのぼっていくに連れて、最後には不思議な圧力で捜査が打ち切られているようですが、つまりそういうことなんですよ」

燈花は書類をバサバサ言わせながら続ける。

「香織の、いや香熾の、火鼠が成したというこの一連の怪火事象。これに客観的に、放火であるという説明がつくんです。誰が放火したかまでは言い切れないにせよ、これが火鼠でないことは、『ねずみのしょんべん』でないことは、明らかだったんですよ」

藤木は黙って、物思いに沈んでいる。

「たまたま昨夜、出来の悪い都市伝説を聞きました。簡単に言うと、怖い幽霊があなたの足を奪いに来るが、神様が守ってくれるので平気ですよ、という話です。それと合わせて思いついたんですけれど。思いついてしまったのですけれど。つまりこれは、藤木先生、あなたがやったのは」

燈花が声を荒げる。燈花のそんな声、僕は聞いたことがない。

「君には怪火が憑いているけれど、狼を憑けてあげるから平気だよ」

僕はもう一度、自分の手を見る。僕には何も見えず、何も感じられない。

「香織の話では、香織は実際に火事が起こるタイミングに現場に居合わせていません。唯一その瞬間を目視したのは犀川大橋の自動車爆発ですが、これはものすごく遠目から眺めただけで、しかもその直後に彼女の記憶は、不思議な催眠術で途切れている。すべての火災は演出可能で、あなた自身が、後付で放火できたんです」

何も見えず、何も感じられない。

「怪火なんて、もともと存在しない。それなのに一連の放火をうまくやることで、状況を作り出すことで、香織に火鼠の存在を信じ込ませた。狼を背負ってくれる人を作り出すために、怪火を演出し、でっち上げた」

燈花が続ける。その向かう先に、僕は辿り着いてほしくない。

「だとすれば、そこには助けようだなんて気持ちは、一つも存在しない。最初から最後まで、あなたは香織を利用しただけです。全部、嘘だった」

燈花が断じる。

「あなたがラストウルフです、藤木先生」

その一瞬の空気が、空間が、甘くて煙たいにおいで満ちる。燈花の必死の形相に、藤木先生は答えない。

ゆっくりと、藤木先生が手を上げて、僕に向かって微笑んで。
「良い友達が出来たね、神谷内くん」

いびつな階段を上り詰めてゼミ室に至ると、微かに心臓がはずみました。

「おはようございます」

「おはよー、燈花ちゃん」

「久しぶり」

部屋にいたのはみとはちさんと草苺さんの二人でした。

なんかものすごい絡み合っていました。

「あの、ゼミ室での密着度合いじゃないと思うのですが」

しかしそれを見るに、この二人は無事仲直りというか、うまくいったのでしょうか。それは素晴らしいことです。

「ちょっと冷房が効きすぎて寒くて」

「冷房止めましょうよ」

「地球のことを思うと止められなくて」

大型のエアコンが鈍い音をたてて冷気を吐き出しています。リモコンには今や『冷やして応援地球温暖化』と書かれています。意味がわかりません。

「まあ良いですけど。お土産です」

私はカバンから、旅行のお土産の『白い恋人』を取り出しました。

「あ、ラング・ド・シャネ」

草苺さんが言いました。

「『白い恋人』を見てすぐラング・ド・シャって言うの、お嬢様っぽいねえ、はるか」

「え、別にそんなことないでしょ」

「聞いてよ燈花ちゃん。こないだはるか二人で牛角に行ったら、牛タンのことをラング・ド・ブフって言ってたよ。お嬢様はすごいね」

いやそれ、お嬢様が牛角で牛タン食べてるほうが面白いですけどね。

「言っていない！ もう八恵は適当なことばかり」

「みとはちさん、あんまり嘘ばかり言うと、閻魔大王にラング抜かれますよ」

「ラング・ド・みとはち？」

「ラング・ド・みとはち」

さすがに。

「それにしても燈花ちゃんと香織っちは、ずいぶん長いことサバティカルしてたねえ」

「サバティカルではなくてハネムーンですね」

「は？」

「いいねえ、はるか、私たちも夏休みどこか行こうか」

夏はすぐそこです。その前に期末試験がありますから、ずいぶんと講義に出ていなかった私と香織は結構追い詰められているのですが。まだ夏休みの予定を考える余裕はありません。

「それと、みとはちさんには色々とお世話になりましたから、追加でこちらもあります」

私は日本酒の瓶を取り出しました。弘前で買ったものです。

「おほー、これはこれは。もう今日ゼミやめる？」

「やめない」

草苺さんがすばやく奪い取ってしまいました。瓶が冷蔵庫に收容されていきます。しかしこの展開は予見済みなので、草苺さんが冷蔵庫の方を向いているすきに、私はもう一本の瓶を取り出してみとはちさんにそっと渡しました。みとはちさんが、お主も悪よのうみみたいな顔をしてそれを受け取り、でも結局どうしようもないので戻ってきた草苺さんに渡しました。冷蔵庫に收容されました。

「それで燈花ちゃん、謎は全部解決したんだよね」

「はい。おかげさまで。ただ、解決してしまったせいで、うちの研究室は崩壊してしまいました」

そうなのです。私たちの自主ゼミは、いよいよもって怪しい団体になってしまいました。もはや、このゼミの存在自体が都市伝説という言葉が真実味を帯びてきてしまいます。何しろ、指導教員が消えてしまったので。教務課は無断サバティカルの可能性を視野に入れて調査すると言っていました。私たちはそれが無期限の失踪であろうことを知っています。あの人は香織から取り上げた狼を持って、どこか山奥にでも行ったのではないのでしょうか。少なくとも大学教員という肩書で再び姿を表すことはないでしょう。さて、日本に狼が復活する日は来るのでしょうか。

「それなんだけど、ざっくりはメールでもらったけどさ。はるか二人で読ませてもらって、若干気になるところがあるんだよねえ。教えてもらっていいかな」

「はい、なんでしょう」

「このメールに書いてあったさ、『みとはちさんの消防の資料』ってこれ、何？」

「え」

エアコンがガタガタと音を立てて冷気を吐き出しています。

私は急に頭が回り始めるのを感じます。頭の芯が熱くなり、背筋が冷たく冷えるような。

「いや、これですけれど……」

私は封筒を取り出して、みとはちさんに渡します。みとはちさんは中身の書類をパラパラとめくり。

「いや、これ私、知らないけど」

「……は？」

「いやいや、いくら私だって消防や警察の内部資料なんか手に入らないよ？　というかなんでこれが私からだって思ったの」

「それはだって、ホテルに届けられたんですよ。私たちの滞在先を教えていたのは、両親とみとはちさんだけ……」

両親がこんなものを送ってくるはずはありません。父と電話した時にこの資料のことは話しま

したから、絶対に違います。そうなれば、送り主はみとはちさんでしかありえない。

「でも私じゃないって」

「そんな」

……いや。

違います。

もうひとりいる。

もうひとり、私たちの部屋番号まで知っている人間がいる。

「あの少年ですか……」

私は彼にエレベーターのボタンを押して貰う時、カードキーの部屋番号まで見せています。むしろ逆に、みとはちさんには部屋番号なんて教えていません。私は偽名で記帳しているのだから、逆にみとはちさんから私に確実に封書を届ける方法はありません。あの少年でなければ、届けられない。

「少年ってさあ」

みとはちさんが苦笑しながら眼鏡を上げます。

「なんか小奇麗で、Nバッグ背負ったら似合いそうで、すぐ舌打ちする癖がある子？」

「それです」

「それ、無量蓮美のパシリだよ」

「な……」

無量蓮美。藤木と同じ会のメンバー。父に六峰神社の情報を吹き込んだという女。

「燈花ちゃんは何を物語られたの？」

「はい？」

「あいつら物語りっていうんだよ。もうずいぶん昔で懐かしいけどさ、香織っちの『江ノ島で初デートすると別れる』の話とおんなじ。あれは、『都市伝説は、あったほうが都合のいい時に語られる』っていう例だったよね。それで『アシキ』の話を推理したでしょう？ そんなふうにも、アナロジー的に使えそうな物語を押し付けてくる、まあ言ってみれば詐欺師みたいなものなんだよ」

詐欺師。あの少年が。

「で、何を物語られた？」

私が語られた物語。あの少年が、私に吹き込んだ考え。

「『怖い幽霊があなたの足を奪いに来るが、神様が守ってくれるので平気ですよ』……」

そうだ。資料とあわせて、あの出来の悪い、謎がない都市伝説から、私は着想したのです。怪火そのものがでっち上げである、作り上げられて打ち消された危機であるという疑惑を。あの少年の話がなければ、資料はうまく繋がらなかったかも知れない。少年こそが、あの都市伝説を私に吹き込んでおいて、資料を送りつけてきた……。

「つまりその推理自体が、ラストウルフの告発自体が、藤木センセー側に仕組まれてたってことだね」

みとはちさんが断言します。

「ど、どうしてそんなことを」

私は混乱します。暴いたと思っていたことが、実は暴くように仕向けられていた？

そうになってしまえば、資料自体の真贋も怪しくなります。果たして本当に連続放火は連続放火だったのか。果たして本当に、香織の怪火憑きはでっち上げの演出だったのか。

そこではじめて、草苺さんが口を開きました。

「香織のためじゃないかしら」

香織のため……？

むしろ、香織がいかに利用されただけなのかを暴いてしまうということは、彼女を傷つけるだけなのではないかと、私は思います。現に彼女は、帰りの道中、すこし塞ぎ込んでいましたから。東京に戻る頃には、いつもどおりの香織に戻っていたのが幸いでしたが。

「そうじゃなくて。香織の怪火を確実に落とすため」

香織の怪火を確実に落とす。

「ただ単に狼がいなくなったら、また怪火が害をなすんじゃないかって、香織は心配になるはずじゃない。でも怪火がそもそも嘘だったんですよということになってしまえば、香織はその心配、しなくて済むでしょう」

私は考えます。もしあの資料がまるごと嘘で、放火の事実がなかった場合。本当に香織に怪火が憑いていて、藤木先生は香織を利用したけれど、助けもしていた場合。そして今、火鼠が彼女から離れたかが、際どいラインだった場合。

「なるほどお、さすがはるか。じゃあセンサーは自分が悪者になって、香織っちを少しでも安全にしようとしたのかな。そんなに極悪人じゃないじゃん。狼柱ってやつ？」

私はまだ、自分の推理が崩れ去ったことに混乱しています。けれど、この新しい説も、認めざるを得ません。否定する材料が、ありません。

「まあ藤木センサーがそうしたかったなら、そうさせてやれば良いんだと思うけどね」

卓に沈黙が降りました。みとはちさんが『白い恋人』の三枚目に突入する音だけが、エアコンの動作音に混じって響きます。

口の中のものを飲み込んで、みとはちさんがぼつりと言います。

「でも香織っちはそのこと、気付いてるのかな」

どうでしょう。

まだ混乱している私でも、でもこれだけはわかります。

たとえ今気付いていなかったとしても、いずれ香織はそれを知るでしょう。香織は知ろうとするでしょう。自分のことに関して、妥協はないですから。その謎は解きにくる。ひょっとしたらもう解いたかも。

ガラリ、とゼミ室の戸が開いて。

「おはようございます」

今日の当番、神谷内香織が登場しました。狼も火鼠も憑いていない、今や真人間の彼女は、いつもと同じく前髪を跳ねさせ、どこか上機嫌で、大事そうに抱えてきた紙束をテーブルに置いて

。

「今日のレジュメです」

「おお、香織っちの出題だ」

みとはちさんがすかさずそれを取り上げ、私と草苺さんも続きます。

この数ヶ月でいくつもの謎が解け、指導教員は消え、ゼミの人外率も低下しました。

けれども、今日の知悉は明日の無知、通暁のちまた夕闇来たる。

謎解きは終わらないのです。

(終)

参考文献

雨月物語評釈 鷓月洋（著） 1969 角川書店

唐宋伝奇集 上 今村与志雄（訳） 2014 岩波書店

弘前城築城四百年 城・町・人の歴史万華鏡 長谷川成一（監修） 2011清文堂出版

ウルフ・ウォーズ オオカミはこうしてイエローストーンに復活した ハンク・フィッシャー（著）朝倉裕、南部成美（訳） 2015 白水社

オオカミが日本を救う！ 生態系での役割と復活の必要性 丸山直樹（編著） 2014 白水社

日本現代怪異事典 朝里樹（著） 2018 笠間書院